

平成 1 5 年度

独立行政法人国立美術館
京都国立近代美術館

事業報告書

目 次

京都国立近代美術館の概要	3
I 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
II 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	7
1. 収集・保管	7
(1) 美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況	7
(2) 保管の状況	8
(3) 修理の状況	9
2. 公衆への観覧	10
(1) 展覧会の状況	10
「常設展」	13
「知られざる西アフリカの美術 富と権力、王国2000年の歴史」展（企画展）	16
「韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術展」展（共催展）	18
「横尾 by ヨコオ：描くことの悦楽—イメージの遍歴と再生」展（企画展）	20
「神坂雪佳展—琳派の継承・近代デザインの先駆者」（共催展）	22
「オーストラリア現代工芸3人展：未知のかたちを求めて」展（企画展）	24
「ヨハネス・イッテン—造形芸術への道」展（特別展）	25
「デカダンから光明へ 異端画家 秦テルヲの軌跡—そして竹久夢二・野長瀬晩花・戸張孤雁」展（共催展）	27
「京都国立近代美術館コレクションから 日本洋画の130年—見つけ、感じ、表現する画家たち」展（共催展）	29
「彫刻家 堀内正和の世界展」（企画展）	31
「東松照明の写真1972—2002」展（テーマ展示）	32
「国立美術館巡回展」展（国立美術館巡回展）	34
「京都国立近代美術館巡回展」	35
(2) 貸与・特別観覧の状況	40
3. 調査研究	41
4. 教育普及	43
(1) —1 資料の収集及び公開（観覧）の状況	45
(1) —2 広報活動の状況	46
(1) —3 デジタル化の状況	48
(2) —1 児童生徒を対象とした事業	49
(2) —2 講演会等の事業	51
(2) —3 友の会活動	53
(3) —1 研修の取組	54
(3) —2 大学等との連携	55
(3) —3 ボランティアの活用状況	56
(4) 渉外活動	57
5. その他の入館者サービス	59

京都国立近代美術館の概要

1. 目的

当館は昭和38年に国立近代美術館京都分館として発足した。京都市による国立美術館の誘致運動が実現したものであり、当初は京都市の要望もあって工芸に主力を置く美術館として性格付けられたが、昭和42年に独立して京都国立近代美術館となってからは広く美術一般にその所掌範囲を拡げて現在に至っている。なお、昭和61年には新館が竣工開館し、4階における常設展がはじめて可能となって、3階の企画展示とあわせて、展示活動もより活発化し、これとともに常設展に必要な作品の収集をより積極的に行うようになった。

当館に課せられた役割は、現代に繋がる美術の歴史を整理検討し、近代美術の将来の発展のために様々な活動を計画し実行することにある。その活動の分野は絵画、版画、彫刻、工芸、建築、デザイン等から写真に至るまで非常に広く、その活動範囲も日本全国の現代美術の振興に資することを目的とするものと幅広い。また、近代あるいは現代の美術を通じての海外との文化交流も任務の一端である。

以上の諸点を踏まえながら、当館は以下の方針のもとに事業を進めている。すなわち、分館当時、京都市の要望に応じて工芸に重点を置いて来た伝統を継承すること、日本の近代美術史の全体的な流れを展望しつつ主として関西で活躍した美術家を取り上げて、京都を中心とする近代美術の回顧、展望を試みること、さらに変貌を繰返す現代美術の動向を国際的な視点から把捉し、その様相の紹介に努めることである。これらの方針は、例年6～7回の特別展・企画展の開催、常設展の実施及び美術作品や美術資料、図書その他の資料の収集などに反映されている。

2. 土地・建物

建面積	5,000.60m ²
延べ面積	9,761.99m ²
展示面積	2,604.94m ²
収蔵庫面積	1,176.70m ²

3. 定員 18人

4. 予算 656,673,333円

I 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - (4) 外部委託の推進
 - (5) 事務のOA化の推進
 - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

〇実績

1. 業務の一元化
平成13年度から実施したものに、情報公開制度の共通的な事務を一元化した。
2. 省エネルギー等（リサイクル）
 - (1) 光熱水量
引き続き通知文書の発信、節水・節電の励行等、職員に対し省エネルギーの啓蒙を行った。
平成14年度と比較すると、水道使用量は節約し得たが、電気、ガス使用量は増加した。これは、夏季において気温が平年並みに高い上、降水量が平年に比して多かったため、温度・湿度の管理を前年より強力に行う必要があり、その動力である電気・ガスの使用量が増加したことによる。夏季の降水量が多く庭樹の散水回数が減少したため水道料使用量を減少できたが、使用量単価が上昇したことにより使用料は増加した。
しかし、光熱水料全体の金額比は1.7%減少している。これは、水道使用量の節約と電気使用量単価の低下によるものである。
ア. 電気 使用量 1,242,221kwh（平成14年度比 103.14%）料金 22,418,115円（平成14年度比 96.62%）
イ. 水道 使用量 7,034 m³（平成14年度比 90.65%）料金 3,100,994円（平成14年度比 89.55%）
ウ. ガス 使用量 125,202 m³（平成14年度比 106.54%）料金 6,031,771円（平成14年度比101.50%）
 - (2) 棄物処理量
一般廃棄物量の減少について、展示会のディスプレイ製作の際、使用する資材の使用量を抑制し、これに伴い発生する廃棄物量も抑制した。館内LANによる通知文書の発信及びファイルサーバーの更新に伴うサーバー保存文書の共通利用、会議資料他の両面コピー等により更なるペーパーレス化を推進した。
産業廃棄物量の減少について、平成14年度の館内清掃・整理作業の際、大量に大型ごみ等を処分したため、平成15年度は廃棄物が多く発生しなかった。また、耐用年数を超過している物品でも利用可能な物は廃棄せず使用している。
ア. 一般廃棄物 16,390Kg（平成14年度比92%）料金 0円（平成14年度比 0%）
イ. 産業廃棄物 130Kg（平成14年度比 3%）料金 73,650円（平成14年度比23%）
3. 施設の有効利用
展示会のイベントとして講演会やシンポジウムを行い、他に団体鑑賞申込時に展示会解説の申し出があれば、可能な限り、解説を行った。また、博物館実習、中学生のチャレンジ体験にも使用した。これらの内、施設使用許可書の発行と使用料の徴収（一部無料）を行って、各種団体に対し講堂・会議室等の使用を許可した。
講堂等の利用率 23%（84日/366日）
講演会 13回
シンポジウム 2回
ワークショップ 4回

展覧会解説	31回
チャレンジ体験	21回
博物館実習	11回
理事会等	4回
講堂使用許可分	8回

4. 外部委託

引き続き下記の業務につき外部委託を実施した。

- | | | |
|------------------|--------------|-------------------|
| 1. 電気・機械設備運転管理業務 | 3. 機械警備業務 | 5. レストラン運営業務 |
| 2. 清掃業務 | 4. 収入金等集配金業務 | 6. ミュージアムショップ運営業務 |

5. O A化

館内LANの整備状況

全館内に整備されており、各職員（含非常勤職員）が1台ずつパソコンを使用できる環境にある。

ファイルサーバーを更新しサーバー内の文書フォルダを整備したことによりフォルダ内の文書を共通利用でき、また、電子メールにより事務連絡を行っている。

紙の使用量 227,500枚（平成14年度比89.5%）

A4 200,000枚

A3 15,000枚

B4 12,500枚

6. 一般競争入札 一般競争入札件数 10件（総契約件数 36件）

本来、美術館は所蔵作品を多数保有しているという点、また、観覧者サービスという点から、一般競争入札は相応しくないが、経費節減に鑑み、平成14年度に引き続き清掃業務、電気・機械設備運転管理業務他について一般競争入札を行っている。

- 1 京都国立近代美術館建物の清掃一式
- 2 京都国立近代美術館電気・機械設備運転管理委託
- 3 京都国立近代美術館受託美術品損害保険 一式
- 4 平成15年度国立美術館巡回展「京都国立近代美術館所蔵 日本画名品展」出品作品の運送等
- 5 「横尾 by ヨコオ：描くことの悦楽—イメージの遍歴と再生」展ポスターB2 1,800枚 他5点
- 6 「横尾 by ヨコオ：描くことの悦楽—イメージの遍歴と再生」展 図録4,000部
- 7 「ヨハネス・イッテン—造形芸術への道」展ポスターB2 1,800枚外5点の製造
- 8 「ヨハネス・イッテン—造形芸術への道」展 図録5,700部
- 9 「ヨハネス・イッテン—造形芸術への道」展 展示工作等 一式の製造
- 10 「彫刻家 堀内正和の世界」展 ポスターB2 1,700枚 外5点の製造

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成14年度と比較して、数値的には増減があるが、全般的に効率化された。

効率化

(1) 業務効率化

ファイルサーバーの更新により、以前にもまして文書管理体制が整備され、係員がサーバーにアクセスすればサーバーに保管している各係の文書を閲覧・使用できるようになり、業務の効率化を図ることができた。また、ファイルサーバーの更新によりサーバーシステムの保守料金を約半額に抑えることができた。

(2) 外部委託の推進

看視業務について効率化・観覧者サービスの維持・向上を目的に外部委託を実施するための検討を1年間重ねてきたが、平成16年度より常設展以外の展覧会において看視業務を外部委託する運びとなった。

(3) 一般競争入札の導入

平成14年度より全契約件数に占める一般競争契約の比率が上昇した。今後も業務の見直しを行い、美術館の事業に影響を及ぼさない可能な業務があれば、効率化と経費節減のため、一般競争入札を導入していきたい。

【見直し又は改善を要する点】

エネルギー使用量を削減するべく努力してきたが、結局、平成14年度に比しエネルギー使用量が増加した。こ

れは主に自然環境等外的要因によるものであるので如何ともしがたいところではあったが、今後も作品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しながら、効率化に向けて検討・努力する必要がある。

【計画を達成するために障害となっている点】

開館より16年が経過し、諸設備の経年劣化が目立ち、省エネルギーも思うように実施できなかった。設備を新規更新し得れば省エネルギー・効率化に資するものとする。

Ⅱ 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況

中期計画

(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。

(京都国立近代美術館)

近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した収蔵品の充実にも配慮する。

○実績

1. 購入	36件		
2. 寄贈	222件		
3. 寄託	38件		
4. 陳列品購入費	予算額	218,917,000円	決算額 407,945,000円

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

当館の活動を支援してきた堂本印象記念近代美術振興財団が解散するにあたり、その基本財産が当館に寄贈され、当館はこれを作品購入にあてることとして受贈した。そのため平成15年度は例年の予算に191,231,955円が加わったため、通常では購入することが困難な高額な作品、坂本繁二郎《松間馬》、堂本印象《江上の鶉舟》、村上華岳《冬ばれの山》の3点をこれによって収集することができた。なお、この他に陶芸では八木一夫の黒陶6点など、日本画では富岡鉄斎、竹内栖鳳、菊池契月などの京都画壇の作家の優作や前田青邨、安田靉彦などの東京画壇の作家の秀作、山崎隆、大野倅嵩、下村良之介など戦後の前衛的日本画家の作品を収集した。洋画については須田国太郎の代表作をはじめ黒田重太郎、三井文二らの記念的作品、写真ではユージン・スミスの作品10点を収集した。また、日本画家、上田萬秋、小川千麿、土田麦僊、三輪晁勢、神阪松濤、秦テルヲ、窶本一洋、洋画家、田村宗立、伊藤久三郎、関根勢之助、版画家、川西英、テキスタイルデザイナー、粟辻博などの遺族から作品及び資料の寄贈を受けるとともに、染織の磯邊晴美、日本画の下保昭、洋画の田淵安一、片山昭弘、版画の川西祐三郎など作家自身からの寄贈もあった。さらに川西英旧蔵の『白と黒』などの版画誌及び資料のまとまった寄贈も今回の特色であった。なお、平成15年度は寄託作品として新たに38件が加わり、オディロン・ルドンやモーリス・ユトリロ、パブロ・ピカソのほか、小磯良平、佐伯祐三などの洋画、北野恒富、中村大三郎などの日本画を受託し、所蔵品の欠を補うことができた。

【計画を達成するために障害となっている点】

当初の計画以外に緊急で高額な作品の購入が必要となった場合、予算で対応しきれないことがある。

*添付資料

- ①収集した美術作品の件数の推移（事業実績統計表 p.1）
- ②寄託された美術作品の件数の推移（事業実績統計表 p.2）
- ③購入・寄贈美術作品の一覧（事業実績統計表 p.65）

(2) 保管の状況

中期計画

- (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。
- (2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

○実績

1. 温湿度

(1) 展示会場

空調実施時間 9:00～17:00

温度 冬季 $22 \pm 1^{\circ}\text{C}$ 夏季 $25 \pm 1^{\circ}\text{C}$

湿度 冬季 $57 \pm 2\%$ 夏季 $53 \pm 2\%$

* 展示会により設定は異なる。

* 入館者が入ったときの温湿度管理について

1日4回温度と湿度を測定している。

* 24時間空調を行わない理由

建物の設計上外気の影響を受けにくい構造であるため、閉館後空調を行う必要がない。

(2) 収蔵庫 (24時間空調は行っていない)

空調実施時間 9:00～17:00

温度 冬季 $21 \pm 1^{\circ}\text{C}$ 夏季 $23 \pm 1^{\circ}\text{C}$

湿度 50% (ただし、日本画・染織・漆芸は $57 \pm 2\%$)

* 24時間空調を行わない理由

建物の設計上外気の影響を受けにくい構造であるため、閉館後空調を行う必要がない。

2. 照明

作品を劣化させる紫外線を含まない蛍光灯などの照明を使用している。

3. 空気汚染

年2回ばい煙測定を行うことにより大気汚染物質を排出しないよう監視している。

また、燻蒸は実施していない。

4. 防災

管理室・機械室において自動火災報知器により管理している。時間外は機械警備により管理。

5. 防犯

時間中は衛視による巡回警備を行い、時間外は機械警備により管理している。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

保存カルテ作成件数は258件である。

収蔵品の保存及び管理環境の維持充実を図るため美術品の種類、保管場所等の違いにより、温湿度や照明等を適正に管理し、作品の劣化を最小限にとどめるよう努力しており、損傷もなく現在に至っている。展示会場や収蔵庫は24時間空調を行っていないが、これは建物の設計上外気の影響を受けにくい構造であるため、閉館後空調を止めても作品保存の上で影響はない。むしろ現実に即した省エネ型の保存対応と考えている。

なお、平成15年度からは当館所蔵品による全国的巡回展を開始し、当年度は日本画作品を巡回したため、日本画作品を点検する好機となった。

【見直し又は改善を要する点】

収蔵作品を充実させるべく積極的に取り組んでいるが、現在すでに作品は収蔵庫の許容量を超え始めており、収蔵品の充実と保管状況の間に無理が生じ始めているため、ラックの増設が緊急の課題となっている。将来的には新収蔵庫の建設も視野に入れておく必要がある。

(3) 修理の状況

中期計画

(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。

- ① 緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。
- ② 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。

(3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。

○実績

1. 日本画 17件 洋画 1件

緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野毎に計画的に修復を行った。

2. 決算額 円 (決算額については、追って記載)

3. 修理経費 予算額 16,228,000円 決算額 11,002,971円

4. その他

修理報告書は各作品について作成しているが、データベース化については引き続き検討中である。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

収蔵時に修理を必要とするものであっても、そのために格安で購入したり、あるいは寄贈を受けることで、タイミングを逃さず収蔵することに積極的に取り組んでいる。そのため収蔵後数年を経て修理する場合もあるが、各年度当初において、中・長期的にみて緊急を要するもの(傷み具合、早期展示の必要性等)から順に修理を行うべく計画性をもって対応している。今回は平成13年度に寄贈を受けた山口八九子の作品を集中的に修理し、近く常設展のテーマ展示としてその成果を公開する予定である。

なお、修理業者に対しては、修理の方法について美術史的な観点から指導するとともに、鑑賞的な観点から表具や額装についても指導を行っている。

【見直し又は改善を要する点】

作品の修理については、常に作品の状態を点検する体制にあることが望ましいが、このような仕事を専門的に行うレジストラと呼ばれる学芸職員を持たないため、点検上困難を伴うことがある。また修理についての専門的知識が少ないため、修理技術についての指導が行いにくい状況である。

*添付資料

- ①修理した美術作品の点数 (事業実績統計表 p.3)
- ②修理した美術作品の一覧 (事業実績統計表 p.93)

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会の状況

中期計画

- (1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。
- (1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。
- (1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。

(京都国立近代美術館)

年6～7回程度

- (1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。
- (1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。
- (1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。
なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。
また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。
- (2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。
- (3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

○実績（総括表）

1. 常設展

展示替 13回 目標入館者数 12万6千人 入場者数 124,885人

2. 特別展・共催展 10回

(中期計画記載回数：年6～7回)

(京都国立近代美術館)

①「知られざる西アフリカの美術 富と権力、王国2000年の歴史」

期間：平成15年4月4日（金）～5月11日（日）

入場者数：9,831人（目標入場者数：1万7千人）

②「韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術展」

期間：平成15年5月20日（火）～6月29日（日）

韓国国立中央博物館、朝日新聞社、NHK京都放送局、NHKきんきメディアプランと共催

入場者数：46,070人（目標入場者数：5万5千人）

③「横尾byヨコオ：描くことの悦楽 -イメージの遍歴と再生」展

期間：平成15年7月8日（火）～8月17日（日）

入場者数：22,145人（目標入場者数：1万9千人）

④「神坂雪佳展 -琳派の継承・近代デザインの先駆者」

期間：平成15年8月30日（土）～10月13日（月・祝）

バーミングハム美術館、朝日新聞社と共催

入場者数：36,497人(目標入場者数：2万1千人)

⑤「オーストラリア現代工芸3人展：未知のかたちを求めて」展

期間：平成15年9月9日(火)～10月13日(月・祝)

入場者数：21,709人(目標入場者数：5千人)

⑥「ヨハネス・イッテンー造形芸術への道」

期間：平成15年10月21日(火)～11月30日(日)

東京国立近代美術館と共催

入場者数：16,115人(目標入場者数：1万1千人)

⑦「デカダンから光明へ 異端画家・秦テルヲの軌跡ーそして竹久夢二・野長瀬晩花・戸張孤雁・・・」

期間：平成15年12月9日(火)～平成16年1月25日(日)

日本経済新聞社・京都新聞社と共催

入場者数：12,350人(目標入場者数：2万人)

⑧「京都国立近代美術館コレクションから 日本洋画の130年ー見つけ、感じ、表現する画家たちー」展

期間：平成16年2月3日(火)～3月7日(日)

京都新聞社と共催

入場者数：14,934人(目標入場者数：1万人)

⑨「彫刻家 堀内正和の世界展」

期間：平成16年3月13日(土)～4月18日(日)

入場者数：2,394人(目標入場者数：1万人(うち平成15年度4千人))

⑩「東松照明の写真1972ー2002」

期間：平成15年4月8日(火)～平成16年4月4日(日)

入場者数：57,381人(目標入場者数：5万5千人)

3. 入館者数 364,311人(目標入場者数343,000人)

「横尾byヨコオ：描くことの悦楽ーイメージの遍歴と再生」、「神坂雪佳展ー琳派の継承・近代デザインの先駆者」、「ヨハネス・イッテンー造形芸術への道」、「京都国立近代美術館コレクションから 日本洋画の130年ー見つけ、感じ、表現する画家たち」、「東松照明の写真1972ー2002」の各展は、予想を上回る入場者数を得たが、「知られざる西アフリカの美術 富と権力、王国2000年の歴史」、「デカダンから光明へ 異端画家・秦テルヲの軌跡ーそして竹久夢二・野長瀬晩花・戸張孤雁・・・」展は知名度の低さから、「韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術展」は出品作品の焦点が絞れなかったところから、意外に入場者が伸びず目標入場者に及ばなかった。「オーストラリア現代工芸3人展：未知のかたちを求めて」展が、目標入場者を大幅に上まわったのは、常設展会場の一部を割いて開催したため、企画展入場者の6割程度、常設展入場者のほぼ全員がこの展覧会を見ることになったためである。これは目標設定時と実績算定時における計算方法の変更によるためである。現在開催中の「彫刻家 堀内正和の世界展」はこの数字には反映されていないが、平成15年度は全体としてすでに目標入場者を上まわっている。

4. 国立美術館巡回展 1回 12,422人

京都国立近代美術館巡回展 5回 40,763人

5. 展覧会開催経費 予算額 138,681,000円 決算額 118,166,542円

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

近年、文化施設の入場者数は軒並みに減少傾向にあるが、美術館も例外ではない。そのような状況にあって、興行的傾向を強めることで、多くの入場者を獲得する方法もあるが、日本の美術館の本来あるべき姿を追求し、公立美術館の模範となるべき活動を展開することが国立美術館に求められていると考える。それは各館の性格を踏まえた上で、なおかつ内容のある多様な展覧会を企画、実施することであると考え、その意味で平成15年度は、地域についてはスイス、オーストラリア、西アフリカなどの作品を紹介し、ジャンルにおいては日本画、洋画、彫刻、工芸、デザイン、写真など多岐にわたり、また、時代も江戸初期に生まれた琳派を近代に継承する神坂雪佳を取りあげるなど、近代から現代に及び、概ねバランスのとれた質的にも高い展覧会を開催することができた。今後も幅広く展覧会を企画する予定である。

*添付資料

- ①入館者数の推移（事業実績統計表 p.4）
- ②入場料収入の推移（事業実績統計表 p.7）

「常設展」

○方 針

4階展示場約1,200㎡を所蔵品及び寄託品による、いわゆる常設展場にあてており、年間約10回の展示替を行いながら所蔵作品等の各分野—工芸、日本画、油彩画、水彩画、素描、版画、彫刻、写真—to わたって紹介している。

基本方針としては、近代日本の美術、工芸、写真について、系統的に展示することになっているが、未だコレクションが十全ではないことと、会場が決して広くはないために、十分な紹介は困難な状態にある。この欠を補うための収集活動（購入、寄贈、寄託）は積極的に行っているが、これは長い時間をかけるべき課題といえる。

このような状況を踏まえた上で、当館のコレクションの特徴となっている長谷川潔（版画）、河井寛次郎（陶芸）、世界の写真は常に作品を入れ替えつつ、特設コーナーにおいて常時鑑賞できるように努めているが、一方、常設展に魅力を与えるべく小テーマを設定したテーマ展示も行っている。テーマの設定には3階の企画展との関連で決定するものと、全く単独で決めるものの2種類に大別でき、主な内容は次のとおりである。

ア 3階の企画展と関連するもの

- ・1960～70年代の版画（横尾byヨコオ）
- ・神坂松濤の日本画を中心に（神坂雪佳展）
- ・京都の工芸と図案（神坂雪佳展）
- ・色彩と抽象表現（ヨハネス・イッテン）
- ・丙午画会の画家たち（秦テルヲの軌跡）
- ・マチエール（東松照明の写真1972-2002）

イ 単独で企画したテーマ展示

- ・人物を描く
- ・アンセル・アダムスの世界
- ・京都の水彩画
- ・夏の風景
- ・須田国太郎の油彩画
- ・アッサンブラージュの世界
- ・夏に寄せて—ガラス工芸を中心に
- ・面と線による抽象表現
- ・裸婦を描く
- ・日本画の前衛（パンリアルの画家たち）
- ・フォト・ドキュメントの諸相
- ・日本の前衛（歷程美術とパンリアルの画家たち）
- ・海外の陶芸と染織
- ・女性の日本画家の世界

○実 績

1. 開会期間

- ①平成15年4月1日～平成15年5月5日（31日間）
- ②平成15年5月7日～平成15年6月22日（41日間）
- ③平成15年6月24日～平成15年8月17日（48日間）
- ④平成15年8月19日～平成15年10月5日（42日間）
- ⑤平成15年10月7日～平成15年11月16日（36日間）
- ⑥平成15年11月18日～平成15年11月24日（7日間）
- ⑦平成15年11月26日～平成15年12月21日（23日間）
- ⑧平成15年12月23日～平成16年2月1日（27日間）
- ⑨平成16年2月3日～平成16年2月8日（6日間）
- ⑩平成16年2月10日～平成16年3月7日（24日間）
- ⑪平成16年3月9日～平成16年3月14日（6日間）
- ⑫平成16年3月16日～平成16年3月21日（6日間）
- ⑬平成16年3月23日～平成16年3月31日（8日間）

計305日間（平成16年3月まで）（所蔵品展のみの開催期間46日間）

2. 会 場 4階常設展場

3. 出品点数

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| ① 167件 | ⑤ 165件 | ⑨ 92件 | ⑬ 160件 |
| ② 174件 | ⑥ 170件 | ⑩ 103件 | |
| ③ 153件 | ⑦ 175件 | ⑪ 129件 | |
| ④ 142件 | ⑧ 128件 | ⑫ 163件 | |

延 1,921件

4. 入館者数 124,885人（目標入場者数 126,000人）

うち常設展のみの入場者数 18,211人

常設展のみの入場者数が目標を下回ったのは、特別展、共催展と常設展を同時に観覧する傾向が高いため。

5. 入場料金 一般420円（210円）、大学生130円（70円）、高校生70円（40円）、中学生以下無料 ※（ ）内は団体

6. 入場料収入（常設展のみの入場料収入の合計 3,332,860円）（目標入場料収入 5,010,000円）

7. アンケート調査

- ①調査期間 平成15年4月1日～平成16年3月31日（305間）
- ②調査方法 館内2箇所にアンケート箱を設置
- ③アンケート回収数 1,705件（3/11まで）
- ④アンケート結果 ・良い 39.8%（678件） ・普通 27.9%（475件） ・悪い 3.5%（59件）
・無記入 20.6%（351件）

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

常設展はそれぞれの美術館のコレクションをダイジェストして紹介するものであり、当館においては年13回の展示替えを行うなど、常設展に変化をもたらすべく努力をしている。年間を通じて開催しているテーマを設けての特設コーナーは好評であり、特に企画展と関連してのテーマ展示は企画展の内容を広げるものとして有意義なものであった。アンケート調査によれば、常設展の内容について肯定的な意見は約70%であり、おおむね好評であった。

【見直し又は改善を要する点】

「常設展」という名称そのものに、常に同じ作品が展示されているとの誤解を一般観覧者に与えることもあると考えられ、常設展についても魅力あるネーミングを考えるべきではないかと考える。小テーマの設定については、展覧会案内板にその名称を掲げてはいるが、まだ広報不足の点があり、企画展ポスターに常設展の内容を併

載するなどの改善を含め、今後とも全体としてのネーミングと併せてさらに検討していきたいと考える。

「知られざる西アフリカの美術 富と権力、王国2000年の歴史」 (企画展)

〇方 針

今まで日本で開催されてきたアフリカ美術の展覧会は、木彫刻やテキスタイルなどジャンルの限られたものがほとんどで、また、対象も「アフリカ」という漠然としたイメージのみによっているものが多かったといえる。本展は、まず対象を西アフリカという美術史的にもっとも多彩である地域に限った上で、その美術活動の歴史を古代から近代まで約 2000 年に渡り見ることができる、日本でははじめての展覧会であった。これは西アフリカの美術だけでなく文化や歴史、政治に関する専門家の協力があるのははじめて可能になるが、今回 Stiftung Vergessene Kulturer (忘れられた文化財財団) の全面的な学術協力により、日本だけでなく世界でも注目される展覧会の開催が実現することとなった。また、西アフリカの美術の古典的作品は、アフリカ諸国との所有権争いを引き起こしかねないとして、西欧でも展示が難しい分野となっているが、この展覧会についてはナイジェリア政府からも協力を得られ、今まで表に出る機会が少なかった作品が一堂に揃う貴重な機会となった。

〇実 績

1. 開会期間 平成15年4月4日(金)～5月11日(日) (33日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館
後 援 ナイジェリア大使館、NHK京都放送局
協 力 JAL日本航空株式会社、京阪電鉄
企画協力 アプトインターナショナル
4. 出品点数 218件
5. 入館者数 9,831人(目標入場者数:1万7千人)

本展は、日本では見ることのできない国宝級の作品が展示されているにも関わらず、アフリカ美術への関心の低さを反映して、入場者数が目標値を下回った。また、独自の企画展であったために広報力が弱く、マスコミからの取り上げられ方が少なかったことも原因であったと考える。特にテレビで多く取り上げられなかったことが大きな要因であったといえる。タイトルにある「知られざる西アフリカの美術」を紹介し興味を持ってもらうには、やはりイメージによる広報が重要であるが、それらの広報を効果的に行えなかったことが入場者数に現れたと考えられる。

6. 入場料金 一般830円(700円・560円)／大学生450円(350円・250円)／高学生250円(200円・130円)／中学生以下無料 ※()内は前売り・団体
7. 入場料収入 4,551,510円(目標入場料収入 9,160,000円)
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容 広大なアフリカ大陸の中でも、特に豊かな歴史と多様性を誇る西アフリカ地域の美術を総合的に紹介。
10. 講演会等 1回 参加人数 59人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、交通広告(京阪電鉄、京都市バス・地下鉄)、看板広告、放送、パブリシティ情報掲載
12. 展覧会関連新聞・雑誌掲載記事等
日本経済新聞社 平成15年4月14日「知られざる西アフリカの美術展」(加藤義夫)
京都新聞社 平成15年4月19日「強いインパクト 精巧な技」(太田垣實)
読売新聞社 平成15年4月21日(夕刊)「生を揺さぶる力 別世界へ誘う」(森恭彦)
産経新聞社 平成15年5月4日「異文化に見つけた美」(早瀬寛美)
13. アンケート調査
①調査期間 平成15年4月4日(金)～5月11日(日) (33日間)

- | | |
|-----------|---|
| ②調査方法 | 館内2箇所にアンケート箱を設置 |
| ③アンケート回収数 | 139件 |
| ④アンケート結果 | ・良い72.7% (101件) ・普通17.3% (24件) ・悪い2.2% (3件)
・無記入7.9% (11件) |

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展は、海外の有名美術館でもほとんど所蔵されていない、紀元前にすでに存在していたノク文化の貴重なテラコッタの像をはじめ、12～16世紀ころイフェ地域で制作された祈禱師などのブロンズの胸像など、国宝と呼ばれる作品が展示された。その意味でも本展は日本におけるアフリカ美術展の記念碑的な展覧会となったといえる。

本展は、日本を5会場巡回した大型巡回展であり、作品内容も前述のとおり海外でも滅多に見ることができない国宝級の作品が数点間近に見ることができるなど、学術的あるいは造形的、美術史的観点からもたいへん興味深い展覧会であった。また西アフリカと限定して構成された展覧会であるがゆえに、その作品も纏まった形で展示できたことは、鑑賞者にも理解してもらいやすかったと考える。一般観覧者の方で強い興味を抱き何度も来館された方もあった。

【見直し又は改善が必要な点】

本展は、独自の企画展であったため広報を効果的に行えず、日本では再び見ることができないような作品が集まっている割には、マスコミからの取り上げられ方が少なかった。教育委員会を通じて学校にも働きかけたが、実際の入場者数にはあまり反映されなかった。本館としても積極的にマスコミや関係機関に広報活動を行っているが、マスコミとの共催展でないので、積極的な取り組みを強制できない現実がある。今後は、広報予算も考慮に入れ、テレビや新聞、雑誌などのマスコミ、とくにテレビに取り上げてもらえるような手段を開発検討しなければならないと考える。また、テレビによる広報は現在、もっとも効果的な方法と考える。

「韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術展」展（共催展）

〇方 針

韓国国立中央博物館は、日本の近代美術品約200点を所蔵している。これらの作品は日韓併合時代の1930年代から40年代前半に、日本の植民地文化政策の一環として、旧朝鮮王室が買い上げ、あるいは寄贈を受けたもので、ソウルにある徳寿宮の石造殿で1933年より順次公開されていた。ところが、日本の敗戦とともに一転して非公開となり、日韓の不幸な歴史背景や、日本に対する韓国の国民感情などから公開されることがなく、「幻のコレクション」と呼ばれてきた。しかし、昨年のワールドカップ日韓共同開催の成功に象徴されるように、両国の文化交流が進む中で、韓国国立中央博物館では、韓国国民に幅広く日本文化に触れる機会を提供することを目的として、所蔵の日本近代美術品を本格的に研究し、順次公開することを決定した。そして、初めての公開作品として、日本画45点、工芸25点の計70点を選び、平成14年10月29日から12月8日まで同館で歴史的な展示をするに至った。本展は、韓国で公開された全作品70点を展示する、初めての里帰り展となった。

〇実 績

1. 開会期間 平成15年5月20日（火）～6月29日（日）（36日間）
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館、韓国国立中央博物館、朝日新聞社、NHK京都放送局、NHKきんきメディアプラン
後 援 外務省、文化庁、駐日韓国大使館、韓国文化院、日韓文化交流会議、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
助 成 日韓文化交流基金
協 力 東亜日報社、全日空、日本貨物航空、アジアナ航空
4. 出品点数 70件
5. 入館者数 46,070人（目標入場者数 5万5千人）
関東圏と関西圏で開催されたが、やはり東京展が最初であり、共催の中心もNHKであったため、その取材や広報などが関東圏に集中した。関西での共催の中心である朝日新聞社も、新聞連載など力を入れ普及広報活動を行ったが、やはり公共放送の果たす役割は大きく、放送メディアに大きく取り上げられなかったことが、東京展との入場者数の差違として現れた。そのため、最初の取材や広報の効果も考え入場者数を設定したが、話題を呼び好評を博した割には目標入場者数に達しなかった。今後は公共放送を中心とした、普及広報活動に力を入れ、新しい鑑賞者も取り込みながら入場者数を増やしていきたい。また、大変意義深い展覧会ではあったが、作品の選択を韓国側で行ったために、作品内容の焦点を絞ることが出来なかったことも入場者数が伸び悩んだ原因と考える。
6. 入場料金 一般1,200円(1,000円)／大・高生800円(600円)／中・小生以下無料 ※()内は前売り・団体
7. 入場料収入 8,743,210円（目標入場料収入 11,540,000円）
8. 担当した研究員数 4人
9. 展覧会の内容
韓国国立中央博物館が所蔵する日本の近代美術品から横山大観、鏗木清方らの日本画45点、松田権六、前大峰らの工芸25点の計70点を日本で初公開した。
10. 講演会等 2回 参加人数 102人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、朝日新聞社及びNHKを中心とする広報、交通広告（京阪電鉄、京都市地下鉄）、看板広告、新聞広告、パブリシティー情報掲載、
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

朝日新聞社 平成15年5月19日(夕刊)「日本近代美術展」(森本俊司)
新美術新聞 平成15年5月21日「日本?で最初の現代美術館を思う」(後小路雅弘)
日本経済新聞社 平成15年5月29日(夕刊)「韓国所蔵の名品ずらり」(加藤義夫)
京都新聞社 平成15年5月31日「垣間見える1930年代の美意識」(太田垣實)
産経新聞社 平成15年6月11日「目を奪う大家の作品」(早瀬寛美)
毎日新聞社 平成15年6月13日(夕刊)「日本近代美術作品 初の里帰り」(岸桂子)
大阪日日新聞社 平成15年7月2日「友好ムードで再び表舞台に」(佐伯瑠璃子)

13. アンケート調査

- ①調査期間 平成15年6月5日(木)～6月8日(日) (4日間)
- ②調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
- ③アンケート回収数 467件
- ④アンケート結果 ・とても良かった46.0%(215件) ・良かった40.3%(188件)
・まあまあ9.2%(43件) ・あまり良くなかった0.4%(2件)
・良くなかった0.0%(0件) ・無記入4.1%(19件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

日本の研究者や関係者の中で早くから望まれていた「幻のコレクション」の公開が、一部ではあったが実現した。これにより、実作品を見ることすら出来なかった個々の作家や、1930年代から40年代の間の日本画、工芸の研究が更に進むことと考える。また、当時はよく知られていながら、戦前に亡くなったために忘れられた作家の作品も含まれており、彼等の仕事の見直しに貢献した。展示作品について、韓国国立中央博物館と協力して調査し、従来希薄であった韓国の美術館、博物館との関係を深めることができた。二国間の不幸な歴史を超えて、新しい関係を築いていくために不可欠な、相互の文化への理解を深める第一歩となった。

【見直し又は改善が必要な点】

工芸作品について、箱の内側や蓋裏等を見たかったという声が寄せられた。今後は、そのような希望に添えるよう、展示を工夫したい。

「横尾 by ヨコオ 描くことの悦楽：イメージの遍歴と再生」展（企画展）

○方 針

京都国立近代美術館は1960年代末より、美術家としての横尾忠則に注目し、幾つかのグループ展に招待してきた。1992年頃には彼の1960年代の重要なシルクスクリーン作品32点を収蔵し、10年後の展覧会開催を目標に作家と協議を続けてきた。合意した目標は、「かつて無かった形の展覧会にする」、「既存の評価にとらわれず、横尾忠則という作家の本質を新しい形で示す」であった。

○実 績

1. 開会期間 平成15年7月8日（火）～8月17日（日）（36日間）
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館
広報協力 毎日新聞社
協 力 京阪電鉄
4. 出品点数 216件
5. 入館者数 22,145人（目標入場者数 1万9千人）
横尾忠則の作品を紹介する美術館の新しい手法が評価され、展覧会来訪者から主に口コミによって評判が広がったことが来館者増に繋がったと考える。20代から60代まで幅広い層の観衆を集めることが出来た。特に若い年代層の来館者が目立った。
6. 入場料金 一般830円(700円・560円)／大学生450円(350円・250円)／高校生250円(200円・130円)／中学生以下無料 ※()内は前売り・団体
7. 入場料収入 8,882,010円（目標入場料収入 9,590,000円）
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容 作家自身が自作と対話しながら、自作の中から重要ないくつかのイメージ展開を分析していく。過去に制作された150点と新たに制作された20点を鍵に作家自身が「現在」という視点から自作を再構成する。
10. 講演会等 2回 参加人数 480人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、毎日新聞社を中心とする広報、交通広告（京阪電鉄、京都市バス・地下鉄）、放送、看板広告、パブリシティ情報掲載、
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
毎日新聞社 平成15年7月5日「横尾展開幕へ展示作業進む」（松田栄二郎）
毎日新聞社 平成15年7月7日「めくるめく横尾ワールド」（皆木成美）
京都新聞社 平成15年7月19日「イメージの横断的連鎖」（深萱真穂）
産経新聞社 平成15年7月30日「横尾忠則と「風狂の滝」」（篠原資明）
読売新聞社 平成15年8月4日（夕刊）「過去と現代行き来 異質な作品に連続性」（木村未来）
朝日新聞社 平成15年8月8日（夕刊）「クラクラくる迷宮の魅力」（森本俊司）
13. アンケート調査
 - ①調査期間 平成15年7月24日（木）～7月27日（日）（4日間）
 - ②調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
 - ③アンケート回収数 439件
 - ④アンケート結果 ・とても良かった29.8%(131件)・良かった37.8%(166件)
・まあまあ18.0%(79件)・あまり良くなかった4.3%(19件)
・良くなかった1.4%(6件)・無記入8.7%(38件)

14. その他

横尾忠則が舞台美術を担当した新作狂言「王様と恐竜」（梅原猛作、茂山千作演出）を展覧会会期中、美術館一階の特設舞台上演した。当館では初めての試みであったが、予想以上の入場者を集め、公演内容も高い評価を得ることが出来た。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

横尾忠則作品を、制作年順や主題別といった既存の展示方法を使わず、各作品の図像的な関係のみで連鎖的に展示する新しい試みが、予想以上の評価を受け、大多数の観客から「横尾忠則に対する新しい理解が拓けた」との好意的な反応を得ることが出来た。作者自身からも「美術館と共に創る展覧会」という新しい試みに自信を得ることが出来たとの言葉が寄せられた。

【見直し又は改善を要する点】

マスコミとの広報協力や口コミにより、会期後半にいたって当初の予想以上に若い年代層の興味を喚起することが出来たが、この年代層を対象にした事前広報が不足していたことを痛感した。開催前における、より緻密な広報計画の必要を感じた。

「神坂雪佳 琳派の継承・近代デザインの先駆者」(共催展)

○方 針

本展覧会は、明治から昭和初めにかけて京都で活躍した、画家・図案家である神坂雪佳(1866-1942)の戦後初・最大の回顧展として計画された。琳派を研究・発展させた雪佳は、工芸家たちとともに新たな近代的工芸の在り方を模索し、佳都美会などの研究団体を主宰して、明治維新以降の京都の美術界において重きを成した人物であったが、戦後、彼の業績は忘れられていた。近年、特に海外で評価の高い雪佳を、伝統的琳派を継承する画家としてだけでなく、今日で言うところのデザイナーやアート・プロデューサーの先駆者として多角的に捉え再評価し、広く一般に紹介することが本展の目的であった。

○実 績

1. 開会期間 平成15年8月30日(土)～10月13日(月・祝)(39日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館、バーミングハム美術館(米国)、朝日新聞社
後 援 京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、NHK京都放送局
協 力 日本航空、国際交流基金、サントリー文化財団、E・ローズ&レオナ・B・カーペンター財団、合衆国芸術基金、ブレイクモア財団、メトロポリタン東洋美術研究センター

4. 出品点数 250件

5. 入館者数 36,497人(目標入場者数 2万1千人)

今日ではほとんど無名の作家に等しい神坂雪佳であったが、予想を遙かに上回る来館者数を記録した。それは、共催者である朝日新聞社の積極的な広報活動によって、ひろく一般の人々の興味が喚起されたことが一因と考えられる。また、出品作品が絵画、漆器、陶器、染織など多方面に及んだため、幅広い関係者の関心を捉えた。しかし、なにより京都の工芸関係者の間では、今も雪佳の名が広く伝えられていたということが、興味深い事実であった。

6. 入場料金 一般1,200円(1000円・900円)/大学生800円(600円・500円)/高校生600円(400円・300円)/中学生以下無料 ※()内は前売り・団体

7. 入場料収入 6,917,780円(目標入場料収入 4,868,000円)

8. 担当した研究員数 1人

9. 展覧会の内容 明治から昭和初にかけて京都で活躍した、画家・図案家である神坂雪佳(1866-1942)の戦後初の回顧展。国内外に所蔵される作品・資料250件で、絵画・工芸両分野にわたる活動の全域に迫る。

10. 講演会等 3回 参加人数 292人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)

11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、朝日新聞社を中心とする広報、交通広告(京阪電鉄、京都市地下鉄)、看板広告、新聞広告、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

雑誌「なごみ」(淡光社)平成15年9月号「特集 都がはぐくんだ天才アーティスト 京琳派・神坂雪佳」

朝日新聞社 平成15年8月27日「伝統と海外の出会い」(池田祐子)

芸術百家 第14篇「神坂雪佳 美の継承と革新」(森恵子)

京都新聞社 平成15年9月6日「図案と絵画 横断的に活躍」(深萱真穂)

産経新聞社 平成15年9月10日「再発見された日本の美意識」(早瀬寛美)

日本経済新聞社 平成15年9月13日「絵画と工芸つなぐ意匠 琳派の画風、近代に継承」(富田律之)

毎日新聞社 平成15年9月12日「斬新なデザインで日常に美」(岸桂子)

朝日新聞社 平成15年9月20日「ほんわか日本の美 榊原京都市立芸大名誉教授に聞く」(森本俊司)

京都新聞社 平成15年9月27日「近代に花開いた江戸の美術」(田島達也)

神戸新聞社 平成15年9月27日「近代デザインの先駆」(三上喜美男)

赤旗 平成15年10月8日「意匠性に美を追究」(大須賀潔)

13. アンケート調査

- ①調査期間 平成15年9月18日(木)～9月21日(日) (4日間)
- ②調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
- ③アンケート回収数 501件
- ④アンケート結果
 - ・とても良かった43.1%(216件)・良かった39.9%(200件)
 - ・まあまあ10.6%(53件)・あまり良くなかった0.8%(4件)
 - ・良くなかった0.2%(1件)・無記入5.4%(27件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展覧会の企画は、アメリカのバーミングハム美術館(アラバマ)と協力して進められた。海外の美術館と調査段階から協力し、展覧会が両国で開催されるのは、当館としては貴重な経験であった。神坂雪佳の作品は、戦後、多くの優品が海外、とりわけアメリカに流出しており、バーミングハム美術館と協力することによって、それらの里帰りが実現した。また、展覧会がアメリカでも開催されることで、雪佳の作品が、日本美術史の枠組みだけではなく、世界の美術史の中に位置づけられる可能性が生まれたことは、特筆に値する。展覧会の日米両国での開催に併せて、カタログも完全なバイリンガルで作成された。雪佳については、昭和56年に榊原吉郎氏が編集した画集以外まとまった資料がなく、本カタログが論文・図版・写真資料を豊富に含む初の包括的書籍であり、今後の研究の試金石たるものとなった。

本展開催と機を同じくして、NHKが神坂雪佳についての特集番組を制作するなど、雪佳芸術再評価の機運は高まりつつあった。その点で、本展の開催は非常に時機に適ったものであったし、その後、新聞・雑誌などで彼の作品・活動が取りあげられることが明らかに増加した。明治以降の社会・産業における近代化の流れの中で重要な役割を果たしたにもかかわらず、画家・工芸作家と比べて、図案家と呼ばれた人々に関する研究は、現状ではまだまだ不十分であるが、本展がその先鞭をなしたことは評価できると考える。また、海外の美術館との共同企画、さらにその展覧会の両国での開催という試みは、今後の当館の活動の展開を考える上で、良い経験であった。

【見直し又は改善を要する点】

本展は、雪佳の極めて広い活動領域を紹介するための展示コンセプトを変更せず、日米4会場で開催することを前提に計画したため、当初から状態が脆弱な絵画・漆器・染織作品を各会場に置き、半分以上の作品の展示替えが必要であった。そのため、来館者(とりわけ後期陳列時のみの)に全作品が見られないという不満を与えてしまった。作品素材の性質上やむを得ないとはいえ、今後は展示替えの総数やその広報について、更に検討する必要があると考える。

「オーストラリア現代工芸3人展 未知のかたちを求めて」(企画展)

〇方 針

現在、オーストラリアで活躍する3人の女性工芸家、ロビン・ベスト、スー・ロレイン、キャサリン・トルーマンによる新作展であった。3人はそれぞれ磁器、金属、木という異なる素材を用い、新しい造形をもとめ制作している。3人の作品は黒を基調としたもので、解剖学や科学的現象に興味を抱き、珊瑚や海綿、あるいは心臓や筋肉などからイメージを創り出し工芸の未知のかたちを暗示するものであった。

〇実 績

1. 開会期間 平成15年9月9日(火)～10月13日(月・祝) (31日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館4階常設展場
3. 主 催 京都国立近代美術館、東京国立近代美術館、アジアリンク
企画協力 ジャム・ファクトリー・コンテンポラリー・クラフト・アンド・デザイン
協 賛 豪日交流基金、オーストラリア・カウンスル
4. 出品点数 27件
5. 入館者数 21,709人(目標入場者数 5千人)
3階企画展示室で、明治末から昭和前までの京都の工芸の革新運動に大きく関わった神坂雪佳展が開催されていたため、工芸に関心の強い鑑賞者が引き続き観賞したことにより、目標入場者数より増加した。
6. 入場料金 一般420円(210円)／大学生130円(70円)・高校生70円(40円)／中学生以下無料
※()内は団体
7. 入場料収入 0円(目標入場料収入 0円)
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容 オーストラリア現代クラフトの最新動向を、陶芸、木工、金工の分野から3人の作家27点を選び紹介。
10. 講演会等 1回 参加人数 108人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、交通広告(京阪電鉄、京都市バス・地下鉄)、看板広告、新聞広告、放送、パブリシティ情報掲載、
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
13. アンケート調査
 - ①調査期間 平成15年9月9日(火)～10月13日(月・祝) (31日間)
 - ②調査方法 館内2箇所にアンケート箱を設置
 - ③アンケート回収数 142件
 - ④アンケート結果 ・良い36.6%(52件)・普通41.5%(59件)・悪い9.9%(14件)
・無記入12.0%(17件)

〇自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展は、オーストラリアの第一線で現在活躍している3人の女性作家の展覧会であり、工芸に伝統のある京都で開催できたことは、工芸における伝統と現代の問題を工芸作家たちが考える良い機会となったと考える。また、関西の鑑賞者には、現在のオーストラリア工芸の動向の一端を紹介できたことも良かった。さらに、京都精華大学と連携して行った講演会には、工芸を専攻している学生が100名近く聴講し、質疑応答などもあり、有意義な講演会となった。

【見直し又は改善を要する点】

講演会は成功に終わったが、2人の作家が来たにも関わらず、ワークショップなどを開催して、日本の作家や学生、鑑賞者とより親密な交流ができなかったことが悔やまれる。予算的、人的な面が大きな問題としてあるが、今後そのような機会が作れるよう努力していきたい。

「ヨハネス・イッテン 造形芸術への道」展（特別展）

〇方 針

平成11年度特別展「日本の前衛1900-1940」展の開催に際し、スイスのベルン美術館との出品交渉時に日本で開催について打診を受けての後、ヨハネス・イッテン財団とも協議を重ね開催が実現したもので、ヨハネス・イッテンの画業の紹介のみならず、広く美術教育者としての一面をも視野に収めて、イッテンが指導した学生の作品などの教育成果をも含めた総合的展示を意図した。

〇実 績

1. 開会期間 平成15年10月21日（火）～11月30日（日）（36日間）
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館、東京国立近代美術館
後 援 スイス大使館
協 力 アサヒビール芸術文化財団、京阪電鉄
4. 出品点数 350件
5. 入館者数 16,115人（目標入場者数 1万1千人）
一般には、あまり広く知られているとはいえない難い美術家の紹介であったが、美術大学、高校等、美術教育現場での関心が大きく、そうした関係者（特に若い人を含めて）の来館が多かった。
6. 入場料金 一般830円(700円・560円)／大学生450円(350円・250円)／高校生250円／
(200円・130円)／中学生以下無料 ※（ ）内は前売り・団体
7. 入場料収入 6,656,890円（目標入場料収入 5,840,000円）
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
スイスのヨハネス・イッテン財団で企画された美術教育資料をもとにした展示を第1部とし、これにわが国独自にイッテンの作品80点を加えた第2部、さらにイッテンと日本のかかわりを示した第3部によって構成。
10. 講演会等 2回 参加人数 164人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、交通広告（京阪電鉄、京都市バス・地下鉄）、看板広告、新聞広告、放送、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
朝日新聞社 平成15年10月1日「「教育者」の幅広い画業」（田中三蔵）
婦人之友 平成15年11月号「ヨハネス・イッテンと自由学園からの留学生」（金子宜正）
産経新聞社 平成15年10月29日「美術教育への情熱」（早瀬寛美）
日本経済新聞社 平成15年10月30日「実験と探究の連続」（加藤義夫）
赤旗 平成15年10月8日「芸術家、教育者、複雑な多面性」（木村理恵子）
京都新聞社 平成15年11月15日「「教育者」の画業を紹介」（深萱真穂）
京都新聞社 平成15年11月29日「展覧会の先にあるもの」（小林昌寛）
13. アンケート調査
 - ①調査期間 平成15年10月21日（火）～11月30日（日）（36日間）
 - ②調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
 - ③アンケート回収数 200件
 - ④アンケート結果 ・とても良かった26.2%(107件)・良かった45.5%(186件)
・まあまあ15.2%(62件)・あまり良くなかった2.0%(8件)
・良くなかった0.7%(3件)・無記入10.5%(43件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

ヨハネス・イッテンは、わが国ではじめての紹介であるとともに、イッテンの初期から最晩年にいたる画業の歩みと美術教育者としての実践過程を、イッテンの作品並びに指導を受けた学生たちの作品とも同化させながら展示し、その有機的な運動を、展覧会という形式において再現した試みとして、大きな反響を得た。また、イッテンは日本の美術にも深い関心を示し、実際、竹久夢二など日本の画家とも交流しており、日本の美術教育界に与えた影響も大きい。「ヨハネス・イッテンと日本」という章も加えて、こうした関係についても作品と資料によって紹介した。

一昨年から「カンディンスキー展」「ムテジウスとドイツ工作連盟展」など、継続してドイツ語圏で展開した20世紀初頭にはじまる新たな美術界の新動向について、今回はスイスを中心に活動したヨハネス・イッテンを取りあげることができた意義は大きい。またわが国では、これまでとりわけ美術教育界では良く知られた存在でありながら、イッテン自身の実作品並びにその教育成果の実例が紹介されたことはなく、さらにイッテンに関する個人画集や研究書なども全く刊行されていない現状を考慮しても、本展開催は待望されていたものであり、開催の意義はきわめて大きく、本展図録も研究資料として貴重である。

【見直し又は改善を要する点】

イッテンについてはわが国ではじめての紹介でもあり、今回はイッテンの作品80点を集め、展示することができたが、なおヨーロッパの美術館にはイッテンの代表作例が5、6点収蔵されているので、将来的にはそうした作品を含めた回顧展決定版の開催も待望されると考える。また、美術教育現場とのより密接な関係を含めた普及広報（本展会期中には、こうしたテーマに基づくシンポジウムを企画した）も、さらに活発に行われるべきであった。

「デカダンから光明へ 異端画家 秦テルヲの軌跡—そして竹久夢二・野長瀬晩花・戸張孤雁・・・」 (共催展)

〇方 針

当館は開館以来、京都ゆかりの近代日本画家の展覧会を開催してきた。その実績により、しばしば作家のご遺族から、作品や資料を寄贈いただいております。明治末から昭和にかけて京都画壇で活躍した秦テルヲの資料、作品も20年ほど前にまとまって館に寄贈された。しかし、どの美術団体にも属さず、個展のみで発表を続けたテルヲは当時殆ど忘れられた存在となっており、展覧会を開催するには時期が早かったことから、当館では常設展やテーマ展に展示し、研究を発表することを続けてきた。それによって美術関係者を中心にテルヲへの注目が集まり始め、作品も少しずつ公表され始めたことから、今回、回顧展を開催することとなった。本展は、まとまったかたちでは初めての紹介であったので、どのような画風の変遷を辿ってきたのかを理解し易いよう、時代順に作品を展示した。また、各章に解説パネルをつけて、その時代ごとの特色を簡単に掴めるようにした。作品だけでなく、資料やスケッチ類も併せて展示し、図録にも掲載して、本展を機会に、よりテルヲの研究が進むよう配慮した。

〇実 績

1. 開会期間 平成15年12月9日(火)～平成16年1月25日(日) (33日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館、日本経済新聞社、京都新聞社
後 援 京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
4. 出品点数 200件
5. 入館者数 12,350人(目標入場者数 2万人)

秦テルヲは一般の認知度は非常に低いが、美術関係者間では以前から注目されており、回顧展の開催が待たれている状態であった。7年前に開催された甲斐庄楠音展も同じような状態で開催され、予想以上の来館者を集めた。今回も同様の期待から、入場者数の目標を予想より五割増しとした。しかし、7年前より経済状況は悪化し、知名度のない作家の展覧会には人が集まりにくかった。

6. 入場料金 一般1,100円(1,000円・900円)／大学生800円(700円・500円)・高校生400円(300円・200円)／中学生以下無料 ※()内前売り・団体
7. 入場料収入 1,575,310円(目標入場料収入 4,448,000円)
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容 秦テルヲと彼と交流のあった竹久夢二、野長瀬晩花、戸張孤雁らの作品約200点によって、秦テルヲの芸術の軌跡と彼が生きた時代を辿る。
10. 講演会等 1回 参加人数 104人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、日本経済新聞社・京都新聞社を中心とする広報、交通広告(京阪電鉄、京都市バス・地下鉄)、看板広告、放送、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業、
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
 - 朝日新聞社 平成15年11月13日「遍歴する異端画家の再評価」(田中三蔵)
 - 日本経済新聞社 平成15年11月19日「闘病の自画像、壮絶な気迫」(宝玉正彦)
 - 京都新聞社 平成15年12月7日「魂の真実に彩られた画業」(太田垣實)
 - 京都新聞社 平成15年12月13日「純真な魂のきしみと祈り」(太田垣實)
 - 毎日新聞社 平成15年12月16日「大正ロマンの影」(田川とも子)
 - 読売新聞社 平成16年1月7日「変化する画風 自らの魂投影」(木村未来)

産経新聞社 平成16年1月7日「社会の悲哀と喜びと」(丸橋茂幸)
京都新聞社 平成16年1月10日「秦テルヲの絶筆発見 緊急公開」
日本経済新聞社 平成16年1月10日「母性の光明求める旅 画風退廃から信仰へ」(富田律之)
毎日新聞社 平成16年1月9日「忘れられた異端画家」に光」(岸桂子)

13. アンケート調査

- ①調査期間 平成15年12月18日(木)～平成15年12月21日(日)(4日間)
- ②調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
- ③アンケート回収数 341件
- ④アンケート結果 ・とても良かった25.8%(88件)・良かった44.0%(150件)
・まあまあ16.4%(56件)・あまり良くなかった2.1%(7件)
・良くなかった0.3%(1件)・無記入11.4%(39件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

テルヲの画業の初期に影響を与え、或いは一緒に活動した画家の作品を展示したが、その時に敢えてテルヲの作品とその他の作家の作品を分けずに展示した。これにより、それぞれの相似点と相違点が鮮明になり、鑑賞者がテルヲの個性を理解し易くなった。

地元紙である京都新聞を主催に加えたことにより、市民からの反応が良く、探すことが困難であった個人所蔵のテルヲ作品や資料が会期中に次々と発見されたことは、非常に喜ばしいことであった。発見された作品は、可能な限り追加展示した。

既に知られた作家の展覧会を開催するだけでなく、美術史上重要でありながら、忘れられた画家の作品や資料を地道に発掘、紹介するという美術館の重要な役割を果たしたことは良かった。また、アンケートやネット上の意見で、「初めて知ったが大変良かった」、「興味を持った」という意見が多く見られ、中にはまる一日をテルヲ作品の鑑賞に費やした人もおり、本展が、テルヲ芸術を一般鑑賞者に紹介する第一歩となったことは、大変喜ばしいことであった。

【見直し又は改善を要する点】

テルヲ初の大回顧展であり、かつ今後も開催が困難と考えられるため、出来る限り多くの作品を展示しようとしたことで、作品の間隔が狭まり、特に書き込みのある《戦中絵日記》33点などの作品をじっくり鑑賞しにくい展示となってしまった。また、点数が多かったため、鑑賞時間が通常よりかかり、最後まで見るできないという意見があった。作品が少なすぎても苦情が出るので難しいところだが、今後アンケートなどを参考に適切な展示点数を考えていきたい。

「京都国立近代美術館コレクションから 日本洋画の130年—見つめ、感じ、表現する画家たち—」（共催展）

〇方 針

昨年、開館40年を迎えた当館が、これまで収集してきた洋画（油彩画・水彩画）作品の成果をはじめで紹介するもので、約750点の収蔵作品の中から厳選した150点を展示し、当館コレクションの特色を示した。一館のコレクションで、わが国における洋画の歩みを語り得る事例としても貴重であり、「京都の近代洋画」にはじまり、現代まで、8章に分けて展覧会を構成した。

〇実 績

1. 開会期間 平成16年2月3日（火）～3月7日（日）（30日間）
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場及び4階常設展場の一部
3. 主 催 京都国立近代美術館、京都新聞社
後 援 京都府教育委員会、京都市教育委員会
4. 出品点数 150件
5. 入館者数 14,934人（目標入場者数 1万人）

平成14年度に同じ趣旨で開催した「日本画への招待」展とも同様であるが、とりわけ京都における洋画、日本画の紹介は、一般の人にとっても関心の高いことが改めて明らかにされ、それが大幅な目標入場者数増となったと考える。

6. 入場料金 一般800円(700円・560円)／大学生450円(350円・250円)・高校生250円(200円・130円)／中学生以下無料 ※()内前売り・団体
7. 入場料収入 2,636,380円（目標入場料収入 3,064,000円）
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容

当館所蔵の洋画作品150点を展示することによって、当館40年の洋画コレクションの成果を示すとともに、わが国130年の近代洋画の歩みをも紹介したのも。

10. 講演会等 2回 参加人数 86人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、京都新聞社を中心とする広報、交通広告（京阪電鉄、京都市バス・地下鉄）、看板広告、放送、パブリシティ情報掲載、関西元氣文化圏参加事業
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
京都新聞社 平成16年2月2日「軌跡を彩る多彩な美と個性」
毎日新聞社 平成16年2月11日「日本洋画の歩み歴然」（横田美晴）
13. アンケート調査
 - ①調査期間 平成16年3月4日（木）～3月7日（日）（4日間）
 - ②調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
 - ③アンケート回収数 341件
 - ④アンケート結果 ・とても良かった25.8%(88件)・良かった44.0%(150件)
・まあまあ16.4%(56件)・あまり良くなかった2.1%(7件)
・良くなかった0.3%(1件)・無記入11.4%(39件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

一館単独の洋画コレクションの成果にとどまることなく、同時にわが国の一世紀の近代・現代洋画の歩みを示し得ること自体、きわめて貴重な事例であり、とりわけ洋画表現形成期の最初期の作例としても珍しい屏風形式の油彩画から、現代の新しい表現までを網羅し、わが国洋画の流れを一望のもとに展示できた点がよかった。また、これまで、日本画、版画の長谷川潔と続けてきたコレクション紹介の「名品集」の刊行を、展覧会の開催にあわせて実現し、広く当館コレクションについて普及できたことも、特色ある取り組みであった。

【見直し又は改善を要する点】

会場スペースの制約から、当館が収蔵する洋画作品約750点のうち150点の展示にとどまったことと、常設展室の一部を使用せざるを得なかったことから、とりわけ現代において大作が多いことともあわせ、さらなる展示方法の見直しの必要性を痛感した。

「彫刻家 堀内正和の世界」展（企画展）

○方 針

京都に生まれ、日本の抽象彫刻の第一人者として知られる堀内正和の没後初めての大規模な回顧展として企画した。代表作をほぼ網羅し、堀内の作風の展開が一目でたどれるように構成するとともに、その着想の源とも呼ぶべき多数のマケットやドローイングを展示し、その創造の過程を紹介した。

○実 績

1. 開会期間 平成16年3月13日（土）～4月18日（日）（32日間：平成15年度は16日間）
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館
協 力 京阪電鉄
4. 出品点数 80件
5. 入館者数 2,394人（目標入場者数 1万人（うち平成15年度内4千人））
6. 入場料金 一般830円(700円・560円)／大学生450円(350円・250円)・高校生250円(200円・130円)／中学生以下無料 ※()内前売り・団体
7. 入場料収入 1,195,510円（目標入場料収入 2,287,000円）
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
日本の抽象彫刻を代表する作家堀内正和の没後初めての回顧展。初期の具象彫刻から晩年の立体作品にいたる約80点の作品、多数のペーパースカルプチュアやデッサンを展示し、創造の全貌を明らかにする。
10. 講演会等 延2回 参加人数 24人（平成15年度に1回実施）
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布を中心とする広報、交通広告（京阪電鉄、京都市バス・地下鉄）、看板広告、放送、パブリシティ情報掲載、関西元気文化圏参加事業
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
13. アンケート調査
 - ①調査期間 平成16年4月15日（木）～4月18日（日）（4日間）
 - ②調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
 - ③アンケート回収数 件
 - ④アンケート結果 ・とても良かった % (件) ・良かった % (件)
・まあまあ % (件) ・あまり良くなかった % (件)
・良くなかった % (件) ・無記入 % (件)
14. その他

○自己点検評価

平成16年度に記載する。

「東松照明の写真1972-2002」(テーマ展示)

〇方 針

1950年代から日本を代表する写真家として活躍する東松照明のカラー作品のみを取り上げた展覧会。東松のモノクロ写真は、日本を代表するドキュメンタリー写真の傑作として内外の評価は確立している。しかし、東松が1972年以降カラー写真にのみ取り組み、優れた作品群を制作していることへの評価は十分ではない。難解と言われる東松のカラー写真作品を、一般鑑賞者にも可能な限り分かり易く提示し、かつ段階的な理解の深化を促すことを目的とした。

〇実 績

1. 開会期間 ①平成15年4月8日(火)～平成15年5月5日(月)(25日間)
②平成15年6月24日(火)～平成15年7月27日(日)(30日間)
③平成15年7月29日(火)～平成15年8月31日(日)(30日間)
④平成15年10月15日(水)～平成15年11月24日(月)(36日間)
⑤平成15年12月23日(火)～平成16年2月8日(日)(33日間)
⑥平成16年3月9日(火)～平成16年4月4日(日)(24日間)
(平成16年3月9日(火)～平成16年3月31日(日)(20日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館4階常設展場
3. 主 催 京都国立近代美術館
4. 出品点数 全305件 (①36、②50、③50、④75、⑤36、⑥58)
5. 入館者数 57,381人(目標入場者数 5万5千人)
6. 入場料金 一般420円(210円)／大学生130円(70円)・高校生70円(40円)／中学生以下無料
※()内団体
7. 入場料収入 0円(目標入場料収入 0円)
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
1950年代から現代まで、日本写真界の最前線で活躍を続けている東松照明の業績を全6回のシリーズで紹介する。
10. 講演会等 1回 参加人数 62人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布を中心とする広報、交通広告、看板広告、放送、パブリシティ情報掲載、
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
日本経済新聞社 平成15年4月14日「集合の美にせまる」(渡辺達治)
産経新聞社 平成15年4月16日「サクラへ、思い託す」(早瀬寛美)
長崎新聞社 平成15年4月27日「アート系に絞って選ぶ 一年を通し展示」
東愛知新聞社 平成15年5月2日「日本人の心象探る全6回」(高石)
産経新聞社 平成15年5月19日「「桜」にみる日本の原風景」(千野境子)
京都新聞社 平成15年8月30日「写真家の二つの影ー東松照明の変容ー」(清水穰)
13. アンケート調査
①調査期間 平成15年10月15日(土)～3月31日(水)(89日間)
②調査方法 館内2箇所にアンケート箱を設置
③アンケート回収数 351件

④アンケート結果	・良い	26.8%(94件)	・普通	36.5%(128件)
	・悪い	4.8%(17件)	・無記入	31.9%(112件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

30年にわたる東松のカラー写真作品を6つのテーマに分割し、一年間にわたって各約50点の作品を6回展示した。4階常設展の一室を使う連続した小展示により、通算300点以上の作品を展示する大規模展と同等の作品を紹介することができた。6回の連続した小展示により、東松の作品展開を容易に辿ることができ、難解な作品へ段階を追って鑑賞を進めることが出来た。今回の試みは、大規模観客動員は期待できないが、美術館が取り上げるべき重要な作家を紹介する展示手法の模索でもあり、美術館の試験的試みに好意的な反響が寄せられた。

【見直し又は改善を要する点】

一年にわたる連続した展示のため、遠距離からの鑑賞者から全体を通観することの困難さについての意見が寄せられた。また、長期にわたる連続展示のため、広報においても新しい取り組みが求められ、持久力のある広報活動の必要性を痛感した。

「独立行政法人国立美術館所蔵 日本画名品展 美しい日本の四季」展（国立美術館巡回展）

○方針

日本画で重要なウエイトを占める花鳥画に焦点を当て、一部人物画をまじえながら花鳥画の基本的な要素である「四季」をテーマとして、日本人の培ってきた美意識を探ることに主眼を置いた。

○実績

1. 開会期間 平成16年1月2日（金）～平成16年2月1日（金）（27日間）
2. 会場 鹿児島市立美術館
3. 主催 京都国立近代美術館、鹿児島市立美術館、南日本新聞社
- 後援 鹿児島県、鹿児島市教育委員会
- 特別協賛 仁田尾の知覧茶園
- 協力 鹿児島音協
4. 出品点数 50件
5. 入館者数 12,422人
国立美術館全体としては2回 18,010人（平成12年度実績：2回 11,959人）
6. 入場料金 一般（大学生以上）1,000円（800円）／高・中生500円（400円）／小学生200円 ※（ ）内は前売り
7. 担当した研究員数 1人
8. 展覧会の内容 京都国立近代美術館、東京国立近代美術館が所蔵する近代日本画を代表する秀作から四季の花鳥画を中心に展示した。
9. 講演会等 1回 100人
①1月18日 「美しい日本の四季と花鳥画」
京都国立近代美術館学芸課長 島田康寛
10. 広報 南日本新聞社を中心とする広報、交通広告、新聞広告、看板広告、放送、パブリシティ
一情報掲載、等
11. アンケート調査
①調査期間 平成16年1月8日～平成16年1月29日（21日間）
②調査方法 館内にアンケート箱を設置
③アンケート回収数 193件
④アンケート結果 ・良い 68%(131件)・普通 21%(42件)・悪い 7%(14件)
・無記入 3%(6件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

これまで鹿児島では、作家を絞った展覧会が多かったが、今回は京都国立近代美術館、東京国立近代美術館より秀作・名作を借り、季節をテーマにした幅広い作家の様々な作品を展示でき、パラエティーに富んだ初の試みで好評を得た。

【見直し又は改善を要する点】

巡回展という初の試みが、県民に浸透するのに時間がかかり、思ったほどの入場者に結びつかなかったと考えられるため、広報活動については早い時期から幅広く行う必要があると考える。

「京都国立近代美術館所蔵名品展 京都日本画 100年の光彩」(京都国立近代美術館巡回展)

○方針

当館の所蔵する日本画の中から、京都画壇の歩みをたどる名品を選び、江戸時代後期の円山・四条派を母体として、ゆるやかに、時には大胆に変貌してきた京都日本画壇の流れをたどり、その優雅で繊細な美意識の伝統を探る。

○実績

1. 開会期間 平成15年4月11日(金)～平成15年5月11日(日) (27日間)
2. 会場 山形美術館
3. 主催 山形美術館、京都国立近代美術館、山形新聞、山形放送、山形テレビ
共催 山形県
後援 山形市
4. 出品点数 72件
5. 入館者数 8,429人
6. 入場料金 一般1,000円/高大生600円/小中生400円
※団体は2割引、土曜日は小中生無料
7. 担当した研究員数 2人
8. 展覧会の内容 京都国立近代美術館所蔵の日本画から名品72点を選び、京都日本画の100年の歩みをたどる。
9. 講演会等 1回 100人
①4月20日 「京都の日本画」
京都国立近代美術館長 内山武夫
10. 広報 山形美術館を中心とする広報、交通広告、新聞広告、看板広告、放送、パブリシティ情報掲載、等
11. アンケート調査 実施無し

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

明治の“文明開化”以降、西洋絵画との葛藤のもとに近代絵画として変遷してきた京都日本画の100年の軌跡を紹介することが出来た。また、京都日本画を概観できる絶好の機会との事由により、東北芸術工科大学在学学生は無料観覧とするなど、大学との連携に取り組むことができた。

【見直し又は改善を要する点】

京都画壇と山形や東北とのかかわり、東北出身の作家などについて、パネル展示等によって補足説明すれば、より理解が深まったのではないかと考える。

「京都の粋—美をみつめるまなざし 京都国立近代美術館所蔵 日本画名品展」展(京都国立近代美術館巡回展)

○方針

当館の所蔵する日本画の中から、京都画壇の歩みをたどる名品を選び、江戸時代後期の円山・四条派を母体として、ゆるやかに、時には大胆に変貌してきた京都日本画壇の流れをたどり、その優雅で繊細な美意識の伝統を探る。

○実績

1. 開会期間 平成15年6月7日(土)～平成15年7月13日(日) (37日間)
2. 会場 秋田県立近代美術館
3. 主催 秋田県立近代美術館、京都国立近代美術館
4. 出品点数 71件
5. 入館者数 4,874人
6. 入場料金 一般800円(720円)／高大生600円(540円)／小中生400円(360円)
※()内は団体
7. 担当した研究員数 1人
8. 展覧会の内容 京都国立近代美術館が所蔵する日本画から京都画壇の美意識と系譜を俯瞰する61作家71点の作品を展示。
9. 講演会等 1回 97人
①6月29日 「生ルゝモノハ芸術ナリ—京都画壇の日本画家たち」
秋田県立近代美術館長 田中日佐夫
10. 広報 秋田県立近代美術館を中心とする広報、交通広告、新聞広告、看板広告、放送、パブリシティ
一情報掲載、等
11. アンケート調査
①調査期間 平成15年6月7日～平成15年7月13日(37日間)
②調査方法 館内にアンケート箱を設置
③アンケート回収数 128件
④アンケート結果 ・良い 79%(102件)・普通 16%(21件)・悪い 1%(1件)
・無記入 3%(4件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

京都画壇の明治～現代の画家たちという、明確な枠組の中で展示できたので、展示全体のコンセプトが伝わりやすかった。東京とは違う、京都の日本画壇でのさまざまな動きを感じることで展示となったと考える。

【見直し又は改善を要する点】

会場の都合上、展示の導線がわかりにくくなり、そのため時代や作家の系統などを理解し難い展示となった。

「日本近代洋画にみる人、花、風景から抽象へ ～京都国立近代美術館所蔵名品展～」 ～」（京都国立近代美術館巡回展）

○方 針

当館が所蔵する洋画の中から名品を選び、明治時代から現在に至る約130年にわたる日本洋画の歴史をたどる展覧会である。西洋絵画を撮取することに始まり、これを日本化し、さらには欧米の美術界と比べても独自の位置を主張し得るまでに成長した洋画の流れを具体的にたどれるよう構成した。

○実 績

1. 開会期間 平成15年8月7日（木）～平成15年9月7日（日）（28日間）
2. 会 場 高岡市美術館
3. 主 催 高岡市美術館、京都国立近代美術館、北日本新聞社
共 催 北日本放送
後 援 富山県、高岡市、高岡市教育委員会
4. 出品点数 71件
5. 入館者数 9,184人
6. 入場料金 一般900円(700円)／高大生700円(500円)／小中生無料
※（ ）内は団体
7. 担当した研究員数 1人
8. 展覧会の内容 明治時代から現代まで、日本洋画の流れを、京都国立近代美術館の作品71点により紹介した。
9. 講演会等 5回 230人
①8月17日 「開催記念講演会 日本洋画の流れ」
京都国立近代美術館学芸課長 島田康寛
②8月8、22日 「夏休み・子供たちのための名画鑑賞会」
高岡市美術館長 遠藤幸一
③8月21日 「県民カレッジ連携ギャラリートーク」
高岡市美術館長 遠藤幸一
④8月26日 「絵画の楽しみ」実技指導
洋画家 林清納
10. 広 報 北日本新聞社を中心とする広報、交通広告、新聞広告、看板広告、放送、パブリシティ
一情報掲載、等
11. アンケート調査 実施無し

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

ちょうど夏休み期間中と重なり、実作を通して日本の洋画の歴史を学ぶ絶好の機会となったため、小・中学生の入場者が多かった。特に、中学生は夏休みの宿題として博物館施設の訪問があり、高岡市美術館では平成15年度初の試みとして、小・中学生を無料としたこともプラス効果をもたらしたと考えられる。また、中・高校生対象のワークショップを行うなど、多くの学生に作品に触れあう貴重な機会を提供できた。

【見直し又は改善を要する点】

展覧会タイトルについて、もう少し華やかさのあるネーミングにするべきであった。また、キャッチコピー等で、これだけの名品が集まることを強くアピールすれば、さらなる入場者増につながったのではないかと考える。

「京都国立近代美術館所蔵日本画名品展」展（京都国立近代美術館巡回展）

○方 針

当館の所蔵する日本画の中から、京都画壇の歩みをだとの名品を中心に、一部東京の作家の作品を含めて、近代日本画の流れを構成する展覧会で、東西画壇の美意識の違いについても実感できるよう構成した。

○実 績

1. 開会期間 平成15年9月13日（土）～平成15年10月13日（月・祝）（27日間）
2. 会 場 弘前市立博物館
3. 主 催 弘前市立博物館、京都国立近代美術館、弘前市、弘前市教育委員会
4. 出品点数 53件
5. 入館者数 7,940人
6. 入場料金 一般700円(500円)／高大生400円(300円)／小中生200円(100円)
※（ ）内は団体
7. 担当した研究員数 1人
8. 展覧会の内容 京都国立近代美術館の所蔵品の中から、近代京都画壇を代表する作品を展示
9. 講演会等 1回 90人
①9月13日 ギャラリートーク
京都国立近代美術館研究員 小倉実子
10. 広 報 弘前市立博物館を中心とする広報、交通広告、新聞広告、看板広告、放送、パブリシティ
情報掲載、等
11. アンケート調査 実施無し

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

中央画壇の作品を観賞する機会の少ない青森県にとって、明治以降から現代までの京都画壇を中心とした日本画の系譜が辿れる絶好の展覧会となった。

【見直し又は改善を要する点】

日本画の他のテーマや、洋画その他のジャンルの巡回展を望む声があった。

「京都国立近代美術館所蔵 日本画名品展

—日本画の巨匠の粋を集めて— 美への誘い」展（京都国立近代美術館巡回展）

○方 針

当館の所蔵する日本画の中から、京都画壇の歩みをだとする名品を中心に、一部東京の作家の作品を含めて、近代日本画の流れを構成する展覧会で、東西画壇の美意識の違いについても実感できるよう構成した。

○実 績

1. 開会期間 平成15年11月6日（木）～平成15年12月7日（日）（28日間）
2. 会 場 盛岡市民文化ホール
3. 主 催 盛岡市文化振興事業団、京都国立近代美術館、岩手日報社
- 共 催 盛岡市、盛岡市教育委員会
- 後 援 岩手県、岩手県教育委員会、岩手県芸術文化協会、岩手県高等学校長会、岩手県中学校長会、岩手県小学校長会、岩手県教職員組合、岩手県高等学校教職員組合、（社）岩手県PTA連合会、岩手県高等学校PTA連合会、岩手県私学教会、IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、エフエム岩手、NHK盛岡放送局、岩手ケーブルテレビジョン
4. 出品点数 53件
5. 入館者数 10,336人
6. 入場料金 一般1100円(900円)／高大生350円(300円)／小中生250円(200円)
※（ ）内は団体
7. 担当した研究員数 1人
8. 展覧会の内容 京都国立近代美術館が所蔵する日本画の名品の中から巨匠たちの粋を集める53点を一堂に展示紹介する。
9. 講演会等
10. 広 報 「もりおか」を中心とする広報、新聞広告、放送、パブリシティ情報掲載、等
11. アンケート調査
 - ①調査期間 平成15年11月11日～平成15年11月25日（14日間）
 - ②調査方法 館内にアンケート箱を設置
 - ③アンケート回収数 156件
 - ④アンケート結果 ・良い 63%(98件)・普通21%(32件)・悪い 6%(9件)
・無記入 11%(17件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

京都国立近代美術館所蔵日本画の名品の数々に触れる機会があり、四国四県と同等の広さの岩手県内各地から訪れる来館者に好評であった。明治から昭和へと、西洋の影響を受けてから多様に変化した京都画壇の画家たちの各々の美意識と作品の魅力は、見る人に強い印象を与えたようであった。

【見直し又は改善を要する点】

広報活動について、より早めに着手するべきであった。岩手県は、日本画が洋画に比べて浸透しないように思われがちだが、遠路足を運ぶ方々のために、今後も展覧会を多様に展開していきたい。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

○実績

1. 貸与・特別観覧の件数

貸与 73件(662点)

特別観覧 74件(387点)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

収蔵品については、外部からの出品依頼が多く、その貸出手続きや作業はかなりの時間と労力を要するが、常設展示が決して広くなく、当館において十分に所蔵品を紹介できないことも考慮し、作品の保存に支障がない範囲で出来る限り依頼に応じ、収蔵品を有効活用するとともに、公私立美術館の活動を積極的に支援して各館から好意的に受けとめられた。特に、山口県立美術館ほか全国巡回する日本伝統工芸展50年記念展「わざと美」に工芸作品21点を、新潟県立近代美術館ほかで開催する「三代藍堂 宮田宏平展」にジュエリー作品31点を、渋谷区立松涛美術館ほかで開催する「谷中安規の夢—シネマとカフェと怪奇のまぼろし—」展に谷中安規の版画作品20点を貸し出したことは特筆される。また、練馬区立美術館ほかと共同企画として開催した「デカダンから光明へ 異端画家秦テルヲの軌跡」展に、当館所蔵の秦テルヲの作品及び資料約90点と関連作家の作品14点を出品したことも注目される。

なお、出版社から「京都国立近代美術館所蔵名品集 [洋画]」が刊行され、これに伴い特別観覧点数が増加している。

【見直し又は改善を要する点】

作品の貸与、特別観覧を積極的に行うこと自体は重要であると考えますが、これにかかる仕事量はそれに伴いますます増加する方向にある。この点を考慮すると、教育普及や作品管理に携わる専門学芸員の増員について、第2期の目標として考える必要がある。

*添付資料

- ①貸与件数等の推移(事業実績統計表 p.8)
- ②特別観覧件数の推移(事業実績統計表 p.9)

3. 調査研究

中期計画

(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。

- <1> 収蔵品に関する調査研究
- <2> 美術作品に関する調査研究
- <3> 収集・保管・展示に関する調査研究
- <4> 美術史、美術動向、作者に関する調査研究
- <5> 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等

(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

○実 績

1. 調査研究

(1) 収蔵品の調査研究

- ①新収日本画作品についての調査研究
- ②所蔵洋画作品についての調査研究

(2) 展覧会のための調査研究

- ①ドイツ工作連盟に関する調査研究
- ②韓国国立中央博物館所蔵の近代日本美術品についての同館との共同研究
- ③神坂雪佳の総合的研究（アメリカ・バーミングハム美術館との共同研究）
- ④横尾忠則の総合的研究
- ⑤中央アジアの染織を中心とする工芸の調査研究
- ⑥秦テルヲの総合的研究（笠岡市立竹喬美術館との共同研究）
- ⑦ヨハネス・イッテンに関する調査研究（スイス・ベルン美術館との共同研究）
- ⑧堀内正和に関する調査研究（神奈川県立近代美術館との共同研究）
- ⑨オーストラリア現代工芸に関する調査研究（東京国立近代美術館との共同研究）
- ⑩東松照明に関する調査研究
- ⑪他の美術館等における調査研究に対する協力

- ・亀井茲明コレクションに関する総合研究（科学研究費補助金・東京大学大学院人文社会系研究文化資源学研究専攻）
- ・京都を中心とした、日本の伝統工芸の過去・現在・将来（国際日本文化研究センター）
- ・水木コレクションの形成過程とその史的意義（国立歴史民族博物館）

(3) 科学研究費補助金による調査研究

- ①琳派の系譜 その継承と交流 ―神坂雪佳を中心（日本学術振興会）

(4) その他助成金

- ①ヘルマン・ムテジウスおよび日本とドイツの言説―1887～1891年（鹿島美術財団）

2. 調査研究費 予算額 3,011,000円 決算額 1,290,708円

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

中期計画に基づいて調査研究をすすめ、平成15年度のみ調査研究と本年を最終年度とする調査研究については、公刊図書及び展覧会カタログにその成果を発表し、平成16年度以降を最終年度とする調査研究はさらに継続していく予定である。また、外部資金による調査研究、外部研究者との交流についても積極的に取り組み、日本学

術振興会、鹿島美術財団などから研究助成金を得て調査研究にあたった。その成果についても、今後積極的に発表していく予定である。

また、他機関を中心とする研究補助金等を受けての共同研究にも参加するなど、積極的に取り組んだ。

【見直し又は改善を要する点】

調査研究及び発表については、外部資金を積極的に獲得したが、将来はこれ以外にも、より多方面にわたる機会と場をとらえて、調査研究と発表活動をする必要がある。

【計画を達成するために障害となっている点】

平成15年度は平成14年度以上に積極的に調査研究に取り組んだが、当館のような少人数の美術館においては、担当展覧会、その他の日常業務をかかえながら、さらに調査研究に携わることには限界がある。これまで以上に調査研究活動に取り組むためには、他館に比べて不足している研究職員の増加が課題となる。

* 添付資料 調査研究一覧（事業実績統計表 p.106）

4. 教育普及

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

○方 針

利用者が主体的かつ創造的に美術館を活用できる環境整備、および利用者の自由な発想を促すための教育セミナー、ワークショップ、広報活動を充実させる。

○実 績（総括表）

- (1) - 1 資料の収集及び公開
 - ①収集件数 1, 256件
- (1) - 2 広報活動の状況
 - ①刊行物による広報活動 3種
 - ②ホームページによる広報活動
 - ③マスメディアの利用による広報活動
- (1) - 3 デジタル化の状況
 - ①平成15年度にデジタル化した美術作品の件数 500件（目標500件）

- (2) - 1 児童生徒を対象とした事業
- ①ワークショップ 4回 子ども168人 保護者43人
- ②生き方探究・チャレンジ体験 7回(21日間) 20人
- (2) - 2 講演会等の事業
- ①講演会 14回 1,125人(平成14年度実績 1,394人)
- ②シンポジウム 2回 136人(平成14年度実績 72人)
- ③スーパー狂言 1回 300人
- (2) - 3 友の会活動
- 会員数 221人
- (3) - 1 研修の取組
- ①美術館等運営研究協議会の開催
- (3) - 2 大学等との連携
- (3) - 3 ボランティアの活用状況
- (登録の人数を含め記載する。)
- ①平成15年度は展覧会聞き取りアンケート及び図録等発送作業を実施 延べ208名
- (又は今後の取り組み)
- 平成16年度は、引き続きボランティアの導入を行う。
- (4) 渉外活動 企業等との連携
- (6) 教育普及経費 予算額 27,800,000円 決算額 13,227,264円

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

当館の基本方針に従い、教育現場の教師や専門家、大学関係者が美術館を創造的に利用し、美術館教育の実践を展開することを積極的に励まし、支援してきた。徐々にではあるが、平成15年度は依頼件数の増加、内容の深化が見られる。今後もこの方針を堅持し展開していく。デジタル情報の公開は、著作権処理に時間を要したため、平成16年度から開始する。友の会については平成15年度に応募を開始し、平成16年度から実質的な活動を開始する。

【見直し又は改善を要する点】

この分野を専門とする職員の雇用養成が急務であるが、諸般の事情により実現をみない。

* 添付資料 教育普及件数の推移(事業実績統計表 p.14)

(1) - 1 資料の収集及び公開（閲覧）の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

○実績

1. 収集

①件数 1, 256件（購入 96件 寄贈 1, 160件）

2. 公開

①公開場所 4階、1階のフリースペースに設置

②公開日数 305日間

③公開資料数 67件

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

国内外の美術館、大学、関係研究機関との資料交換を継続し、かなりの点数の寄贈図書があった。また、基本的な図書、今後の調査研究、及び展覧会企画に必要な図書類を積極的に購入した。

当館には、構造的に美術図書閲覧室を設ける空間的余裕はないが、1階及び4階のフリースペースにコーナーを設けて一部を入館者に公開するよう努めた。そのため、開館日にはいつでも誰でも閲覧できる体制となり、入館者からは好評であった。なお、当館に空間的余裕がないことの打開策として、当館が開催した展覧会330回（3月末現在）の図録のうち、残部に余裕があるものについて、287冊を隣接する京都府立図書館に寄贈したため、当館の展覧会図録が閲覧可能となった。

【計画を達成するために障害となっている点】

上記のように、隣接の図書館で当館の展覧会図録の閲覧が可能となったが、建物に空間的余裕がないことと、これに専従する人員がないことが、現在もなお閲覧室新設にあたっての根本的な障害となっている。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。

また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実績

1. 広報誌名

(1) 年報

①発行年月日 平成16年3月発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

②料金 無償

③配布先 全国美術館・博物館、大学・学校等

(2) 概要

①発行年月日 平成15年6月発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

②料金 無償

③配布先 全国美術館・博物館、大学・学校等

(3) 展覧会に伴う図録の編集・発行

①発行年月日 6回発行（編集6回・発行3回）

②売価 日本近代美術展（編集） 2,000円

横尾byヨコオ展（編集・発行） 2,000円 神坂雪佳展（編集） 2,500円

ヨハネス・イッテン展（編集・発行） 2,000円

秦テルヲ展（編集） 2,300円 堀内正和の世界展（編集・発行） 1,890円

③配布先 全国美術館・博物館、大学・学校等（無償）

(4) 美術館ニュース「見る」

①発行年月日 奇数月発行（発行済み回数6回、発行部数6冊）（年度計画記載発行回数 6回）

②料金 無償

③配布先 会場内配布、全国美術館・博物館、大学・学校等

(5) カレンダー（展覧会予定表）

①発行年月日 平成16年1月発行（発行回数3回）（年度計画記載発行回数3回）

②料金 無償

③配布先 会場内配布、全国美術館・博物館、大学・学校等

(6) 「京都国立近代美術館所蔵名品集 [洋画]」の編集

①発行年月日 平成16年2月発行（発行回数1回）

②料金 2,520円

③配布先 書籍として館内及び一般書店で販売。

○自己点検評価

1. 展覧会の記事掲載

【良かった点、特色ある取組み】

通常、新聞社や美術関係及び一般情報誌の依頼により、プレスリリース、出展作品の写真などの資料を送付し、展覧会の記事掲載をしている。また、展覧会についてより詳しく紹介してもらえるよう取材の受入も適宜実施している。

【見直し又は改善を要する点】

最近、記事掲載の依頼先から、概ね展覧会会期の2、3ヶ月前に料金や講演会などの詳細を知らせてほしいとの要望が多いので、早い時期に回答できるように対応する必要がある。

また、展覧会に関する講演会以外のイベント（ワークショップなど）も、より一層紹介していきたい。

2. ホームページの掲載

【良かった点、特色ある取組み】

当館のホームページの掲載以外に、私設の美術館関係ホームページの掲載を行っているところへ当館の展覧会紹介の掲載を依頼している。

【見直し又は改善を要する点】

現在は、基本的に文字情報を主として掲載を依頼しているが、先方から作品の画像データの掲載を求められることが多く、展覧会を問わず、著作権上問題のないものは可能な限り対応したい。

3. 館パンフレット、展覧会ポスター、などの掲出

【良かった点、特色ある取組み】

館パンフレットや年間展覧会案内、チラシを作成して館内で配布する外、他の美術館、観光案内所などに掲出している。また、生涯学習センターなど来館する客層にあわせて展覧会資料を重点的に掲出するようにしている。

【見直し又は改善を要する点】

ポスター、チラシなどを他の美術館などに掲出及び配布してもらっているが、宣伝効果を上げるためにも部数や送付先について再検討したい。また、年間カレンダーは、先方から早く送付して欲しいとの要望があり、作成時期の再度検討したい。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

○実 績

1. 所蔵作品のデジタル化

- ①平成15年度にデジタル化した美術作品の件数 500件 (目標500件)
- ②平成15年度末収蔵作品数 7,494件
- ③平成15年度末デジタル化作品数 3,850件
- ④今後のデジタル化の対応 毎年 500件をデジタル化予定

2. ホームページのアクセス件数 233,521件

ホームページのアクセス件数は、順調に伸び、昨年に比べて3万件を超えることになった。このアクセス件数の増大は、昨今のデジタル化への国民の高い関心と整備されたインフラ、ネットユーザーの増加が大きな要因と言える。情報をインターネットで検索し、それをを用いる時代が到来したことを物語る一つの例である。ただし、この中にはハッカーやクラッカーの攻撃も入っていることは忘れてはならないのである。

3. デジタル化した情報の公開

- ①HP等による公開件数 60件

平成14年度に引き続き、画像の公開については、所蔵作品のカラーポジフィルムが順調にデジタル化しているので、それを基に、まずは館内のネットワークで段階的に増やしていくつもりである。しかし、画像公開には著作権という大きな制約もあり、この著作権の許可に基づき館外への公開も合わせて行っていくつもりである。また、平成16年度ホームページ上に著作権切れの作品を公開するため、平成15年度はその準備を行った。突然ではあったが文化庁のポータルサイトへの協力も行った。このポータルサイトについては、今後もできる範囲で協力を推進していく。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成15年度もアクセス件数の増大につれてネチケット（ネットワークのエチケット）を守らないハッカーやクラッカーが増え、多くの攻撃を受けた。文部科学省からの指導もあり、セキュリティに対しては、日々チェックしている状態である。このような攻撃を受けても当館のネットワークシステムやサーバを守り抜かなければならず、それらは大変な作業量であった。また、日々、この種のアタックやウィルスなど、館内、館外のネットワーク管理には多大な労力を使っている。平成15年度も外部からの攻撃から館のネットワーク環境を守れたことは良かったことである。

【見直し又は改善を要する点】

平成14年度同様、当館では、ネットワーク及びコンピュータ管理には常勤、非常勤にしても人員はおらず、研究官1名が併任担当している。現在も相当な合理的、効率的な管理を行っているが、システムの更新や管理など、人員と予算を考えると自ずと限界が訪れることは明白である。これらの状況の解決に向けての検討を、さらなる合理化の上、今後押し進めなければならないと考える。特に、平成16年度から始まるホームページ上での著作権切れ画像の公開に当たっては、さらなる業務の拡大が予想されるので、館の中での分散処理をどう押し進めるかが改善の大きなポイントである。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

実績

1. 事業名 子どものためのワークショップ

①開催期間

- ア. 平成15年7月19日 (1回) (開催場所: 京都国立近代美術館)
- イ. 平成15年11月1日 (1回) (開催場所: 京都国立近代美術館)
- ウ. 平成16年2月20日 (1回) (開催場所: 京都国立近代美術館)
- エ. 平成16年3月13日 (1回) (開催場所: 京都国立近代美術館)

②参加者数 子ども168人 保護者43人

③担当した研究員数 2人

④事業内容 学校現場の教師に美術館の創造的利用を促すとともに、教師と美術館職員が対話しながら、教師自身が発想し運営するワークショップ

2. 事業名 「生き方探究・チャレンジ体験」事業

①開催期間

- ア. 京都市立御池中学校 平成15年5月28日～平成15年5月30日 (3日間)
- イ. 京都市立西賀茂中学校 平成15年6月10日～平成15年6月12日 (3日間)
- ウ. 京都市立四条中学校 平成15年9月9日～平成15年9月11日 (3日間)
- エ. 京都市立神川中学校 平成15年10月21日～平成15年10月23日 (3日間)
- オ. 京都市立近衛中学校 平成15年11月5日～平成15年11月7日 (3日間)
- カ. 京都市立朱雀中学校・旭丘中学校 平成15年11月11日～平成15年11月13日 (3日間)
- キ. 京都市立春日丘中学校 平成16年1月27日～平成16年1月29日 (3日間)

②参加人数 20人

③参加した研究員数 2人

④事業内容 中学生を受け入れ美術館業務を体験させることにより、美術への関心を高めるとともに、社会の一員としての自覚を育成する。

⑤その他 平成13年度から実施しているが、受入件数も増え、定着しつつある。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

この活動についての当館の取組みは、「美術館が強制するプログラムではなく、教育現場の教師の創造的発想を励まし、その取組みを支援する」という立場を堅持している。ア)、エ)は、小学生とその親が参加し、教師と美術館の学芸員を交えて作品を題材にして語りあう試みである。イ)京都市図画工作研究会のワークショップは、生徒と保護者のチームにデジタルカメラを持たせ、自分が気に入った作品を撮影し、みんなの前でその記録を披露しながら意見や感想を述べるものであり、カメラを介するだけできわめて活発なコミュニケーションの場となった。教師側が従来の美術鑑賞の枠を超えようとする取組みとして評価できる。ウ)京都市立伏見南浜小学校のワークショップは、作品を前にして車座になって教師と生徒が親密な対話を交わそうとするヨーロッパ型の観賞教育の実践であったが、京都芸術造形大学写真科の学生がこのワークショップを撮影取材し、ドキュメンタ

リーの制作、あるいは写真作品とする機会を提供した。ワークショップ参加者と大学生の双方に刺激的な機会となり、将来、美術館の教育普及活動における大学との連携の布石として評価できる。

【見直し及び改善を要する点】

ワークショップ自体は充実したものであり、参加者の満足度は高かった。しかし、一般観客から、ワークショップ参加者の会話などが、静かな観賞環境を妨害するとして抗議が寄せられた。一般観客に対する美術館教育への理解を高める、よりいっそうの努力が必要である。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画

- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

実績

1. 講演会 12回 (年度計画記載回数: 各展覧会1~2回) ※別添「4-(5) 講演会一覧」
- ①開催期間 12 (日間)
 - ②開催場所 京都国立近代美術館1階講堂
 - ③参加者数 993人
 - ④担当した研究員数 7人
 - ⑤事業内容 一般入館者を対象に展覧会に即した内容をわかりやすく講演する。
 - ⑥アンケート結果 (回答数378件) ・良い 70.6% (267件) ・普通 20.1% (76件)
・悪い 1.9% (7件) ・無記入7.4% (28件)
2. 友の会会員向け講演会 1回
- ①開催期間 平成16年3月27日 (1日間)
 - ②開催場所 京都国立近代美術館1階講堂
 - ③参加者数 24人
 - ④担当した研究員数 1人
 - ⑤事業内容 友の会会員を対象に展覧会に即した内容をわかりやすく解説した。
3. シンポジウム 1回 (年度計画記載回数: 1回)
- ①開催期間 平成15年11月8日 (1日間)
 - ②開催場所 京都国立近代美術館1階講堂
 - ③参加者数 56人
 - ④担当した研究員数 1人
 - ⑤事業内容 「ヨハネス・イッテンー造形芸術への道」展に関連し、学校現場と美術館教育について、パネリスト4人を招き、討議を行った。
4. 大学との共催による講演会 1回
- ①開催期間 平成15年10月8日 (1日間)
 - ②開催場所 京都精華大学黎明館
 - ③参加者数 108人
 - ④担当した研究員数 1人
 - ⑤事業内容 「オーストラリア現代工芸3人展」の開催にあわせて来日した出品作家2名による講演会を、京都精華大学との共催により開催した。
5. 大学との共催による国際シンポジウム 1回
- ①開催時期 平成16年2月7日 (1日間)
 - ②開催場所 京都国立近代美術館1階講堂
 - ③参加人数 80人
 - ④担当した研究員数 1人

- ⑤事業内容 立命館大学21世紀COE京都アートエンターテイメント創成研究及び日本美術教育学会との共催で実施した。韓国嶺南大学から教授を招き、国内大学の美学研究者と観賞教育のあり方について討議を行った。

6. スーパー狂言

- ①開催時期 平成15年8月5日(1日間)
②開催場所 京都国立近代美術館1階ロビー
③参加者数 300人
④担当した研究員数 1人
⑤事業内容 横尾忠則が舞台美術を担当した狂言「王様と恐竜」(梅原猛作、茂山千之丞演出)を上演した。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

各展覧会ごとに、1～2回程度、一般入場者を対象とした内容の講演会を開催する一方、専門的知識を求める聴衆を対象とした講演会やシンポジウムを、当館独自で、また大学と協力して3回開催した。また、今回は横尾忠則展にあわせて、横尾が舞台美術を担当した狂言の上演を試み、予想以上の好評を博した。さらに、平成15年度から活動を開始した友の会会員を対象として講演会を行い、美術の理解と普及に努めた。

(2) - 3 友の会活動

○実績

1. 会員数 221人
2. 活動内容 会員向け講演会を実施。(3月27日実施、参加者24人)
3. その他 平成15年4月1日から京都国立近代美術館友の会を発足。平成15年3月より募集を開始した。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

近代美術に関心を持つ人々の観賞や研究の便宜を図り、かつ、当館の活動を支援してもらう目的で平成15年度に発足した。一般会員、特別会員、法人会員の3種類の会員制度があり、この一年間で218人(3/22現在)の入会者があった。特に、特別会員、法人会員が全体の4分の1を超え、まだ少数ではあるが地域の企業等からの支援を得てきた。また、会員の特典として当館の展覧会以外でも国立美術館(他の3館)の常設展が随時観覧でき、さらに国立国際美術館の企画展が各展覧会ごとに1回観覧でき、また国立博物館(関西の2館)の常設展についても団体料金で観覧できるなど幅広い利用が可能となっている。

【見直し又は改善を要する点】

平成15年度は会員の募集を中心とした活動を行ってきたが、平成16年度以降については、会員の募集と並行して会員に対する様々な事業を展開し、友の会活動の充実を図りたい。

(3) - 1 研修の取組

中期計画

- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。

○実績

1. 文化庁との共催事業

(1) 美術館等運営研究協議会の開催

- ①研修期間 平成15年11月26日～平成15年11月27日（2日間）
- ②開催場所 京都市立国際交流会館
- ③参加者数 73人
- ④担当した研究員数 1人
- ⑤事業内容 美術館・歴史博物館の運営の充実に資するため、公私立の美術館・歴史博物館の管理・運営・利用に関係する者が、相互に知識や経験の交流を図り、研究協議を行う。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成14年度に引き続き、文化庁との共催で美術館等運営協議会（テーマ：「美術館・歴史博物館と学習支援」）を開催し、関係機関の研究協議に協力し成果があった。

【計画を達成するために障害となっている点】

学芸担当職員研修制度を設けたが、1～2ヶ月では十分な研修が行えず、他方で、十分な研究を行うために長期間研修員が勤務館を離れることは、当該館の仕事に支障を来す恐れがある。内部研修を受けることができない小規模館では尚更である。この点が本制度の課題及び障害となっており、平成15年度に研修希望者がなかった大きな理由と考えられる。

(3) - 2 大学等との連携

○実績

1. 博物館実習生
 - ①受入期間 1期：平成15年8月25日～平成15年8月29日（5日間）
2期：平成15年9月1日～平成15年9月5日（5日間）
二期間：平成15年8月25日～平成15年9月5日（10日間）
 - ②開催場所 京都国立近代美術館
 - ③参加者数 13大学21名
 - ④担当した研究員数 7人
 - ⑤事業内容 美術館業務全般にわたる実習
2. 博物館実習生
 - ①受入期間 平成15年12月9日～平成16年5月5日（10日間）（平成15年度は5日間）
 - ②開催場所 京都国立近代美術館、京都服飾文化研究財団
 - ③参加者数 京都橘女子大学13名
 - ④担当した研究員数 1人
 - ⑤事業内容 平成16年度に京都服飾文化研究財団と共催で開催予定の展覧会に準備段階から立ち上げまでに参加することで美術館業務を実習する。
3. 講演会（（3）講演会等の事業に前掲）
4. シンポジウム（（3）講演会等の事業に前掲）
5. 子どものためのワークショップ（（2）児童生徒を対象とした事業に前掲）

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

- 1) 博物館実習は受け入れ数を従来の半数に厳選した結果、特に実務実習において、以前にもまして細やかで充実した実習を行うことが出来た。
 - 2) 京都橘女子大学の実習は、大学の正規の授業を美術館の展覧会活動の中で実施し、準備段階から学生に実務的な経験の場を与える全く新しい取り組みであり、将来において美術館を大学教育の現場とリンクさせる試みである。
 - 3) 日本美術教育学会と共催した国際シンポジウム「美術館教育はどうあるべきか」は、各国の取り組みについての情報交換、大学の有識者の理念と美術館の現場との乖離の認識において、きわめて有意義であった。
- その他) 当館は美術館を大学の授業の現場として利用するよう、京都市内の大学に働きかけを続けており、平成15年度も5件の利用があった。当館職員もその実施に積極的に協力している。

【見直し又は改善を要する点】

大学の教育現場として美術館を利用する可能性について、大学当局との研究を重ね、より創造的な利用を模索していく必要がある。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

○実績

1. 活動内容

平成15年度は、「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」を主催する京都市教育委員会と連携し、展覧会の聞き取りアンケート、広報物・展覧会図録の発送作業を実施した。28日、延べ208人を動員した。

2. 今後の取り組み

平成16年度は、15年度に実施した聞き取りアンケート調査を継続するとともに、各種印刷物等の発送業務を更に拡充し、新たな分野を開拓する準備を進めていきたい。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

平成15年度に開催した6回の展覧会で聞き取りアンケート調査をボランティアにより実施した。6回の展覧会で合計2,636名の方の協力が得られ、目標の調査数を超過達成することが出来た。参加したボランティアの年齢構成がかなり高く、人生経験の豊かな人が多いため、聞き取り時における調査対象とのトラブルもなく、アンケートの記入内容も通常の自由記入型のものより詳しく記載されたものが多く、今後の業務改善に役に立つ有効なものとなった。

また、今年2月には初めての試みとして行った、各種印刷物等の発送業務には急な募集にも拘わらず、延べ37名の参加があり、展覧会の図録、チラシ、ポスター、招待状、記者発表案内、機関誌「見る」等の発送を遅滞なく行うことが可能となり、有効な広報活動が実現できた。

【見直し又は改善を要する取り組み】

上記活動は初年度としてはかなり順調な出だしとなり、問題となることはほとんどなかった。この1年間の取り組みにより、当館のボランティアとして登録した方が23名となったが、今後更に登録者数を増やし50名の規模にしたいと考えている。これにより、完成時期の不規則なポスター、チラシ等の発送業務にも臨機応変な対応が出来る、ボランティアの緊急募集も可能になってくると考える。

現在は全てのボランティアが同列であるが、将来的には当館の方針に賛同し、協力してくれる人を捜し、ある程度の業務を任せられるリーダーを育成したい。同時に、高度なボランティアコーディネーターの役割を果たせるよう、館職員を必要な研修に参加させ、実績のある他館との交流も深めていきたい。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

○実績

① (社) 京都市観光協会との連携

(社) 京都市観光協会が実施している「京都修学旅行パスポート」事業に協賛し、小中学生の入場料無料化とは別に「京都修学旅行パスポート」を持参の修学旅行の高校生を団体料金で入場できるようにした。また、受付にて絵はがきのプレゼントを、喫茶にて割引サービスを実施した。

② 京都織物卸商業組合との連携

京都織物卸商業組合が実施している「京都きものパスポート」事業に協賛し、きもの産業の活性化及び入館者増を図るため、きもの着用者に特別展入場料金を団体料金で優待。

③ 京都市交通局との連携

京都市交通局が「スルッと関西」交通網を利用して実施する「京都1dayチケット」事業へ協賛し、当該チケット利用者に対し特別展料金を前売料金で優待。

④ 京都市と京都陸上競技協会との連携

京都市と京都陸上競技協会とが実施する「京都シティーハーフマラソン」に協賛し、当該マラソン参加者に対し、共催展入場料金を団体料金扱いとした。

⑤ 京都市産業観光局との連携

京都市が制定した「伝統産業の日」に因み実施する事業に協賛し、きもの着用者を常設展を無料とした。

⑥ (財) 大阪21世紀協会との連携

(財) 大阪21世紀協会が発行する関西で唯一の英・日併記の情報誌「MEET OSAKA」に関西地区の美術館、博物館が展覧会情報を掲載し、経済界と連携した広報活動を行い、日本を訪れる外国人の入場者増を図る。

⑦ 単独開催展覧会の前売券の発売

民間企業とのタイアップし、利用者のチケット入手の利便性を高めるとともに、入場者増を図った。

⑧ (財) 京都市駐車場公社との連携

(財) 京都市駐車場公社と連携し、岡崎公園駐車場を利用の有料入館者に対し、駐車場料金の割引をした。

⑨ 朝日友の会との連携

朝日友の会事業と連携し、会員(朝日メイト)に対し、企画展(一部除く)観覧料金を団体料金扱いとした。

⑩ (社) 日本自動車連盟(JAF)との連携

(社) 日本自動車連盟(JAF)と連携し、JAF会員に対し、常設展及び企画展の観覧料金を団体料金扱いとした。

⑪ 京都学生祭典との連携

京都学生祭典「学生の日」に協賛し、期間中、「京都学生祭典クーポン券」を提示の利用者に対し、常設展及び企画展の観覧料金を団体料金扱いとした。

⑫ 「関西元気文化圏」への参加

文化庁が提唱した「関西元気文化圏」へ参加し、展覧会ポスター、チラシ等にロゴマークを印刷するなど。

⑬ 「関西文化の日」への協力

関西広域連携協議会及び関西元気文化圏推進協議会が実施する「関西文化の日」事業に協力し、11月1日～3日までの常設展及び11月3日の企画展観覧料金を無料とした。

⑭ 「国際博物館の日」事業への協力

(財) 日本博物館協会が実施する「国際博物館の日」事業に協力し、5月18日の常設展料金を無料とした。

⑮ トマト倶楽部との提携

京都新聞社のトマト倶楽部事業と提携し、会員に対し、企画展観覧料金を団体扱いとした。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

美術館事業を充実させるためには、企業、財団等からの研究・展覧会等への助成、後援、協力を得るなど、積極的な企業等と連携を図ることが必要である。そのため、広く企業等に対する美術館事業への理解の促進を図り、有効な事業展開、支援を得られるよう渉外活動に努めた。特に平成15年度は、全国的に活動する日本自動車連盟（JAF）や、関西で8万人の会員数を誇る朝日友の会との連携が実現したことにより、入場者数の増加を図ることが出来た。

また、関西広域連携協議会等が実施する「関西文化の日」事業に協力し、文化力の向上に寄与できた。さらに、日本自動車連盟（JAF）とのタイアップを円滑に進めるための駐車場の問題も、京都市駐車場公社との連携によって解消された。

【見直し又は改善を要する取組み】

全国的あるいは地域的に活動する企業等との連携には力を注いできたが、展覧会の割引制度の告知のための、各誌への掲載時期が入場者の動員に影響するため、今以上のタイムリーさが要求される。

【計画を達成するために障害となっている点】

企業等との連携による割引の種類が増えることによって、窓口業務が煩雑になりトラブルの要因となる恐れがある。

5. その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

○実 績

1. 高齢者・身体障害者のための施設整備等 (1)-1
 - ①障害者トイレ 1個所（1階 1個所）
 - ②障害者エレベータ 1基
 - ③段差解消（スロープ） 3個所（正面玄関、喫茶室）
 - ④貸出用車椅子 5台（座席昇降機能付き2台を含む）
2. 観覧環境の充実 (1)-2、(1)-4
 - (1) 音声ガイド
 - ①展覧会名 韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術展
 - 貸出期間 平成15年5月20日～6月29日
 - 貸出件数 2,762件（利用率 6%）
3. 夜間開館等の実施状況 (1)-3
 - (1) 夜間開館実施状況
 - ア. 開催日数 24日間（4月4日～10月13日までの特別展・共催展開催期間中の金曜日午後8時まで）
 - イ. 入館者数 1,899人（総入場者数 17,589人、夜間開館入場率 10.8%）
 - ウ. 実施日 4/4, 11, 18, 25, 5/2, 9, 23, 30, 6/6, 13, 20, 27
7/11, 18, 25, 8/1, 8, 15, 9/5, 12, 19, 26
10/3, 10
 - (2) 小中学生の入場料の低廉化
昨年に引き続き、平成15年度開催の全ての共催展で小中学生の無料化が実現した。
 - (3) (2) 以外の入場者料金の取り組み方
平成15年4月1日から常設展の学生料金を大学生料金と高校生料金に分け、高校生料金の低廉化を実施するとともに、特別展の高校生料金の低廉化を実施した。
 - (4) その他の入館者サービス
4. アンケート調査(1)-3
 - ①調査期間 平成15年5月20日～6月29日（4日間）「日本近代美術展」
平成15年7月24日～7月27日（4日間）「横尾byヨコオ」
平成15年9月18日～9月21日（4日間）「神坂雪佳展」
平成15年11月6日～11月9日（4日間）「ヨハネス・イッテン」
平成15年12月18日～12月21日（4日間）「秦テルヲの軌跡」
平成16年3月4日～3月7日（4日間）「日本洋画の130年」
 - ②調査方法 各展覧会会期中の4日間にボランティアによる聞き取りアンケートを実施した。また、館内にアンケート箱を設置しており、入館者の意見を随時受け入れている。

③アンケート回収数 2,636件

とても良かった 32.3% (851件)、良かった 43.9% (1157件)

まあまあだった 14.2% (375件)、あまり良くなかった 1.8% (48件)

良くなかった 0.4% (11件)、無記入 7.4% (194件)

④アンケート結果 立地、施設、展示内容については概ね70点以上の評価を得たが、観覧料金、接客で60点程度の評価であった。

5. 一般入館者等の要望の反映 (2)

京都国立近代美術館では、常時アンケート調査を実施しており、苦情、要望等への迅速な対応のほか、入館者のニーズの把握に努め、例えば、作品内容を解説した説明パネルやキャプションの文字を見やすく大きくしたり、館内案内表示の増設等を行った。

6. レストラン・ミュージアムショップの充実 (3)

喫茶室では食器類のデザインを一新し、展覧会ごとのテーマメニューの提供を行った。また、喫茶室の禁煙化を実施した。ミュージアムショップでは、関西経済連合会の主宰による「ミュージアムグッズの共同開発」の一員となり、お客様の要望に応える商品開発に取り組み始めた。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

京都市駐車場公社と連携し、岡崎公園駐車場を利用の有料入館者に対し、駐車場料金の割引をした。

隣接の京都府立図書館と協力し、過去の展覧会図録が府立図書館において閲覧可能となった。

入口に各種割引の情報案内、3階会場内に観覧順路の表示、4階ロビーに眺望案内写真と周辺地図を設置するなど、入場者に対する案内表示を充実させ、利便性の向上に努めた。

また、美術館敷地の入口に点字板を設置したり、インフォメーションに老眼鏡を3種用意するなど、バリアフリー化の推進にも取り組んだ。

外国人入館者への対応として、平成14年度に引き続き、8カ国語の館案内リーフレットを常備した。

【見直し又は改善を要する取組み】

一般入館者の要望等を把握するために、常時アンケート調査を実施しているが、今後も苦情、要望等に対して迅速に対応していきたい。